

昭和五十一年三月二十五日發行

萬葉學會

赤人の吉野讚歌……………清水克彦(一)

——作歌年月不審の作群について——

旅人の歸京行程……………林田正男(二〇)

——宮本氏説に關連して——

憶良における陶淵明の影響の問題……………黒川洋一(三〇)

——「貧窮問答の歌」をめぐる——

大佛開眼會の漢詩……………藏中進(三七)

黄葉片々

かげろふの石……………奥村恒哉(五四)

書評

伊藤博著『萬葉集の構造と成立』(上・下)……………渡瀬昌忠(五)

萬葉

第九十一號

昭和五十一年三月

第九十號目次

人麻呂の作歌精神……………	村田正博
——「吾等」の用字をめぐって——	
東歌「安可見夜麻」考……………	椎名嘉郎
古代形容詞の形成に関する一つの問題……………	工藤力男
——スミノエとスミヨシをめぐって——	
安積皇子挽歌試論……………	身崎壽

赤人の吉野讃歌

——作歌年月不審の作群について——

清 水 克 彦

一

周知のごとく、山部赤人の吉野讃歌には、天平八（七三六）年夏六月の応詔作歌（卷六・一〇〇五—六）以外に、なお次のような、長反二組五首の作群がある。

山部宿禰赤人が作る歌二首并せて短歌

やすみしし わご大君の 高知らす 吉野の宮は たたなづく
青垣ごもり 川なみの 清き河内ぞ 春へは 花咲きををり
秋されば 霧立ち渡る その山の いやますますに この川
の 絶ゆることなく ももしきの 大宮人は 常に通はむ（卷六・九二三）

反歌二首

み吉野の象山さきやまのまの木末こめれにはここだも騒く鳥の声かも（九二四）
ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く（九二五）

やすみしし わご大君は み吉野の 秋津あきつの小野の 野の上に

赤人の吉野讃歌

は 跡見とみすゑ置きて み山には 射目いめ立て渡し 朝狩に 鹿猪しし
踏み起こし 夕狩に 鳥踏み立て 馬並なめて み狩ぞ立たす
春の茂野に（九二六）

反歌一首

あしひきの山にも野にもみ狩人きつや 獵矢や手挟み騒きてあり見ゆ（九二七）

題詞に作歌の年月も作歌事情も記さないこの作群は、年代順を配列の原則とする萬葉集卷第六において、「神龜二（七二五）年乙丑夏五月、芳野離宮いひまに幸す時」の、笠金村の作品（九二〇—二）に続けて載せられている。従って、一見金村と同時の作のようにも見えるが、反歌九二七の左注に、「右、先後を審つばひらかにせず。ただし、便たよりを以ちての故に、この次に載す。」とあり、作歌年月不審のままに、内容の類似をもって、ここに載せた旨が述べられているのである。ところで、厄介なことに、この作群が長反形式二組より成っており、また、金村作とおなじ夏五月の作であることを明確に否定する

表現が、後の長歌（九二六）の結句、「春の茂野に」以外には見出されないことから、この左注、とりわけ前半の「右、先後を審らかにせず。」は、甲乙二通りの解釈を可能にする。すなわち、代匠記（精撰本）が、「長短合テ四（五の誤りか）首ニ互ル歟。又初ノ一首并短歌ハ金村ト同時ノ歌ニテ、後一首并短歌ノ事ヲ注セルカ。」と、疑問のかたちで提示した両案がそれで、古来の諸注いずれもこのいずれかを採っているが、作歌の年月が不審なのは、前者に拠れば、この作群の全部、後者に拠れば、九二六―七の、後の一組のみということになる。しかし、これはいったいいずれを正しとすべきなのであろうか。本稿では、この問題をも含めて、作品の内実と史実とにそくしつつ、この作群の作歌年月に関する一つの推論を展開しようと考えているのである。

二

やすみしし わが大君の 聞こしめす 天の下に 国はしも
 さはにあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の国の
 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太しきませば ももしきの
 大宮人は 舟並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕川渡る この川の
 絶ゆることなく この山の いや高知らす みなそそく 滝
 のみやこは 見れど飽かぬかも（巻一・三六）

反歌

見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む
 （三七）

やすみしし わが大君 神ながら 神さびせずと 吉野川 た
 ぎつ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせせば
 たたなはる 青垣山 山祇の 奉る御調と 春へは 花かざ
 し持ち 秋立てば もみちかざせり 行き沿ふ 川の神も 大
 御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に 小網
 さし渡す 山川も 依りて仕ふる 神の御代かも（三八）

反歌

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に舟出せずかも（三九）
 これは、柿本人麻呂の吉野讚歌であるが、赤人の長歌九二三は、そのすべての句が、この人麻呂の作を踏まえているもののように思われる。今、赤人の作を基準として、踏まえた人麻呂の句を下段に示すとすれば、おおよそ次のごとくである。

やすみしし わが大君の	やすみしし わが大君の（三六）
高知らす 吉野の宮は	やすみしし わが大君（三八）
たたなづく 青垣ごもり	聞こしめす……吉野の国の（三六）
川なみの 清き河内ぞ	たたなはる 青垣山（三八）
春へは 花咲きををり	山川の 清き河内と（三六）
	春へは 花かざし持ち（三八）

秋されば 霧立ち渡る	秋立てば もみちかざせり (三三八)
その山の いやますますに	この山の いや高知らず (三三六)
この川の 絶ゆることなく	この川の 絶ゆることなく (三三六)
ももしきの 大宮人は	ももしきの 大宮人は (三三六)
常に通はむ	絶ゆることなくまたかへり見む (三七)

類似度のやや稀薄な部分もないわけではないが、この長歌が、人麻呂の吉野讚歌全般に深く負っていることは、おそらく誰の目にも明らかであろう。

対して、後の長歌(九二六)では、この人麻呂の作を踏まえた句が、それほど多いというわけではない。しかし、「やすみしし わご大君は」には「やすみしし わが大君(の)」(三三六、三八)があり、また、「朝狩」「夕狩」に対する「朝川」「夕川」(三三六)、「馬並めて」に対する「舟並めて」(三三六)のように、かえって先の長歌三六との間に、いくらか類似の語句を見出すことが出来るのである。

ところで、わたくしはこの作群の、人麻呂の吉野讚歌に負うところは、たんにこのような語句の面にとどまるものではないと考える。すなわち、すでに岡部政裕氏も指摘されているように、^(注一)人麻呂の吉野讚歌と赤人のこの作群との間には、それぞれ、先の一組が宮ぼめ、後の一組が君ぼめの歌であるという共通点が見出される。とすれば、

赤人の吉野讚歌

先に指摘した語句踏襲の状況とも考え合せて、赤人の二組五首は、二組四首から成る人麻呂の吉野讚歌全体を踏まえて構想されたもので、この作群は、同時に作られた一つの作品と見るべきものではないだろうか。人麻呂、赤人両者の、各二首の長歌の冒頭に見える「やすみしし」が、原文いずれも先の長歌で「八隅知之」、後の長歌で「安見知之」となっていることも、この考えの傍証と見うるのではないかと思うのである。

しかし、それにもかかわらず、赤人のこの作群に、一見こう考えることをためらわせるような原因のあることが、まったく理解されないというわけではない。それは、おなじく先の一組が宮ぼめ、後の一組が君ぼめの歌であるといっても、人麻呂の作では、先の一組にも、「やすみしし わが大君の 聞こしめす 天の下」、**「御心を、吉野の国」、**「宮柱 太しきませば」などをはじめとする君ぼめの要素があり、また、後の一組にも、「……登り立ち 国見をせば」、**「たたなはる 青垣山」**などをはじめとする宮ぼめ(国ぼめ)の要素があつて、二組が共に二つの要素を含みつつ、主眼が宮ぼめから君ぼめに移行するという過程をたどっており、^(注二)従つて、われわれはここにこの二組の有機的な関連を見出しうるのに対して、赤人の作では、長歌九二三冒頭の、「やすみしし わご大君の 高知らず 吉野の宮」という君ぼめの要素を含んだ一つの表現を除い

て、もつぱら先の一組は宮ぼめ、後の一組は君ぼめを歌っており、宮をほめることが、そこに行幸した君をほめることに連なるのは理解出来るとしても、両者の関連はかなり隠微で、一見両者は別個の作品のようにも思われるという点である。

けれども、わたくしはこれを、赤人の組歌に比較的例の多い、いわば彼の表現の一特色とも見るべきものではないかと考える。すなわち、今この作群の中からも一つの例を挙げるとすれば、先の一組における、長歌と反歌との関係などは如何であろうか。

み吉野の象山のまの木末にはここだも騒ぐ鳥の声かも(九二四)
ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く
(九二五)

たしかに、この二首の反歌は、吉野の「清」なる山(九二四)と川(九二五)との状況を歌うことによって、長歌の「たたなづく青垣ごもり」と「川なみの清き河内ぞ」とに対応し、また、両首に歌われた盛んな鳥の声は、長歌の「花咲きををり」、「霧立ち渡る」とともに、この宮地の旺盛なありさまを述べて、宮ぼめの心をあらわしたものと理解される。しかし、一面この両首は、例えば人麻呂の吉野讃歌における二首の反歌、

見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む

(三七)

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に舟出せずかも(三九)のように、各長歌の末尾をそのままに承け、のみならず以下の部分にも長歌との間に類句の見出される作品とは違って、いずれも長歌には見えない鳥の声を歌い、しかもその鳥の声一つにきびしく焦点が絞られていて、一首としての独立度がきわめて高い。この両首は、^(注三)長歌との関連を振り切り、単独で叙景の秀歌としてしばしば称揚されたが、これは必ずしも和歌即短歌の時代における評者の、誤った鑑賞法のせいのみではなかったと思われる。赤人は一首の焦点を一つに絞ることによって、表現が明澄で独立度の高い作品の創造に成功した。しかし、組歌においては、それが逆に各首間の関連を隠微にする結果をもたらしてしまったのである。

このような次第で、わたくしは赤人のこの作群を、同時に作られた一つの作品であると考ええる。そして、長歌九二六の結句に「春の茂野に」とあり、また、君ぼめの心を歌った後の一組(九二六―七)で、人麻呂の「たぎつ河内に舟出」する天皇の叙述(三九)を措き、いかにも男性の天皇にふさわしい「秋津の小野」に「み狩」「立たす」ありさまを取りあげているところから、この作品は、或る年の春、聖武天皇の吉野行幸に従駕した赤人が、詔に応じて作歌し、献上したものに相違あるまいと考えるのである。

続日本紀に記録された聖武天皇の春の吉野行幸は、神亀元（七二四）年春三月の一回限りである。しかし、続紀には、時に行幸記事の記録洩れがあり、（げんに金村の作八九二〇―二〇二〇のある神亀二年夏五月の吉野行幸は、続紀には見えない。）従って、赤人の作を、ただちにこの時のものと決めてしまうわけにはゆかない。

あしひきの み山もさやに 落ちたぎつ 吉野の川の 川の瀬
 の 清きを見れば 上辺には 千鳥しば鳴く 下辺には かは
 づ妻呼ぶ ももしきの 大宮人も をちこちに しじにしあれ
 ば 見るごとに あやにともしみ 玉かづら 絶ゆることなく
 万代に かくしもがもと 天地の 神をぞ祈る かしこくあ
 れども（巻六・九二〇）

反歌二首

万代に見とも飽かめやみ吉野のたぎつ河内の大宮所（九二二）
 皆人の命も我もみ吉野の滝の常磐の常ならぬかも（九二二）

これは、神亀二（七二五）年夏五月の、笠金村の吉野讚歌であるが、伊藤博氏や川口常孝氏は、赤人が作歌にあたって、金村のこの

作を意識した形跡があるとし、赤人の作品を、神亀三（七二六）年以後（ただし神亀年間）の春における、続紀には記し洩らされた吉野行幸のさいのものと推定されている。しかし、これははたしてそう見るべきものなのであろうか。

赤人の吉野讚歌

伊藤氏は、論文の注記に右の結論を示されているだけで、氏の御見解の詳細を知ることが出来ないので、わたくしはもっぱら川口氏の解かれるところにそくして考える他はないのだが、川口氏は、まずはじめに、赤人の作中、とくに先の一組（九二三―五）と金村の作との間に、類似する句の著しく多いことを挙げ、それを次のごとく表示されている。上が金村、下が赤人の句である。

長歌

吉野の川の	吉野の宮は
川の瀬の 清きを見れば	川なみの 清き河内ぞ
ももしきの 大宮人も	ももしきの 大宮人は
玉かづら 絶ゆることなく	この川の 絶ゆることなく

反歌

み吉野の滝	み吉野の象山
長歌↓反歌	
千鳥しば鳴く	千鳥しば鳴く
反歌↓長歌	
常ならぬかも（結句）	常に通はむ（結句）

そしてさらに、吉野をあらわす原文の文字と言葉が、両者一致して、長歌で「芳野」（右表①の部分）、反歌で「三吉野」（右表⑤の部分）となっている（もつとも、金村の反歌九二二には「三芳野」

とあるが、氏はこの歌は非赤人的で、赤人の用いるところとならなかつたものと見ておられる。ことを指摘し、この事實は、このような表記や言葉が集中この二人に限られるものではないにしても、なお両者が「聴聞（誦詠）の関係ではなく披見の関係」であることを物語るものであると考えられているのである。

以上は、両者の間に存在する表現上の類似を通して、両者の密接な関係を指摘されたものと理解されるが、その関係が、赤人が金村の作を模倣することによって生じたものであることについては、次の三点が挙げられている。すなわち、それは、第一に、右表における長歌の部分の内、③と④とは赤人の作にあらわれる順序が逆になつており、「しかもそれが④・③と直接して、歌のリズムとしては流麗であるのに、その配置の心ざまには他者模倣の一種の口ごもりがうかがえる」こと、第二に、金村の長歌は二十三句、赤人の長歌は十九句より成っているが、十九句が二十三句になつたと考えるよりも、むしろ「その逆を考える方が、模倣の心理なり論理なりに訴えて自然」であること、第三に、「赤人が長歌二首を作っているのは、やはり先行作品を受けての発展と見なすべきもの」であること、の三点である。

しかし、この三点の内、第二と第三とは相矛盾する見解のようにも思われ、第一の点についても、この主張の主眼をなす末尾の部分

を、わたくしはまったく理解することが出来ない。のみならず、そもそも右表に示された赤人の句は、はたしてその金村の句とそれほど類似しており、それを模倣することによって生まれたものだったと考えるのであろうか。

右表における赤人の句（下段）の内、③と④とは、まったく同一の句が人麻呂の長歌三六にあり、赤人はむしろ人麻呂の句を踏襲したものと見るべきである。また、②の「川なみの 清き河内ぞ」と①の「吉野の宮は」については、神亀以前の吉野讚歌にまったく同一の句を見出すことは出来ないが、②には、やはりおなじ人麻呂の長歌三六に「山川の 清き河内と」があつて、金村の「川の瀬の 清きを見れば」よりも類似度が高い（赤人が山を加えなかつたのは、これを「たたなづく 青垣ごもり」と述べて山と川を対句で表現したからだ。）し、①についても、構文の面をも含めて考えた場合、むしろ養老七（七二三）年の金村の吉野讚歌における、「……み吉野の 秋津の宮は」の方に近いといふべきではないだろうか。そして、金村のこの作（九〇七）は、^{（注六）}別稿でわたくしが述べたところが承認されるとすれば、赤人の神岳の作（卷三・三二四）を踏まえていることになるが、そこには「……明日香の 古き都は」の句があり、都や宮を主題とし、その景観を述べる構文は、すでに赤人自身に前例があるということになるのである。

⑦の「常に通はむ」と金村の「常ならぬかも」との類似点は、共に結句であるということ、(しかし、赤人作では長歌、金村作では反歌の結句であるという違いがある。)および、「常」の語を共有しているということだけで、両句の意味はまったく異なっている。意味の面から言えば、赤人の「常に通はむ」は、むしろ人麻呂の反歌三七や、それを踏まえた養老七(七二三)年の金村の或本反歌九一一の、「絶ゆることなくまたかへり見む」の方が、近似の内容をあらわしているものと見るべきであろう。

⑥の「千鳥しば鳴く」は、両首において一致する句であり、また、吉野讃歌の中では、この両首にしか見られない句である。もともと、川口氏も述べられているように、養老七(七二三)年の車持千年の吉野讃歌(九一五)に、「千鳥鳴くみ吉野川」とあって、吉野の千鳥はすでに千年によって歌われており、これがこの句の創造に役立ったかも知れない。しかし、その創造者が、金村であったか赤人であったかは、いずれとも考えうることである。このことは、吉野をあらわす原文の文字と言葉が、両者いずれも、長歌で「芳野」、反歌で「三吉野」となっている点についても同様である。

以上に述べたように、両者の間に存在する類似、もしくは共通の語句や表記は、いずれも、赤人が金村のこの作を踏まえた結果であることを明確に主張しうるようなものではない。のみならず、類似

句として金村の句に対比された赤人の句のすべては、人麻呂の作、または養老七(七二三)年の金村の作中に、いっそう近似する句や一致する句を持っており、少なくともこれらについては、赤人が金村のこの作をまず意識し、もっぱらこれを模倣したとする見解は、否定されねばならないものと考えられる。

金村のこの吉野讃歌の特色は、「万代に かくしもがもと 天地の 神をぞ祈る かしこくあれども」(九二〇)と、繁栄している吉野の宮の永続不変を神に祈り、「皆人の命も我もみ吉野の滝の常磐の常ならぬかも」(九二二)と、聖地吉野の滝の常磐にあやかっ て、我を含めた皆人の命の常ならむことを願っているところにある。すなわち、ここには、人や人の営みの有限を自覚した人間の、神に対する祈りや願いが卒直に歌われているのであるが、対する赤人の作の方は、むしろ人麻呂に近い楽天的な宮ぼめ、君ぼめの心を歌ったもので、この作において、金村作の特色が、赤人によって意識され、踏まえられているとは思われない。

もともと、同じ年代の人間として、赤人にも有限の自覚がなかったわけではなく、また、^(注七) 彼が永続不変を願わなかったわけでもない。このことは、すでに別稿で述べた通りである。しかし、公的な讃歌において、背後に吉野の宮の有限を予想するような表現を用いたり、生命の永遠を願うといった、私的、人間的な願望を歌ったりするこ

とは、この吉野讃歌では、なおはばかられているのである。なお、ついでをもつて一言すれば、天平八（七三六）年の作（巻六・一〇〇五―六）には、「この山の 尽きばのみこそ この川の 絶えばのみこそ ももしきの 大宮所 止む時もあらめ」（一〇〇五）とある。これは反実、仮想の表現ではあるが、とにかくここで「大宮所」の「止む時」が仮想されていることはたしかである。赤人が吉野讃歌にこういう表現を持ち込むことに踏み切り得たのには、一つにこの金村の前例が、有力な梃子となったのではないかと思う。すなわち、この両者に関しては、わたくしは金村から赤人への影響を認めるべきものと考えるのである。

以上に述べたように、赤人のこの吉野讃歌が、神亀二（七二五）年夏五月の金村の作を意識し、これを踏まえたとする確実な根拠を、わたくしは見出すことが出来ない。従って、両作の先後についても、この面からは、いずれとも決めることが出来ないと考える。

四

わたくしは赤人のこの吉野讃歌を、続紀に見える神亀元（七二四）年春三月の、聖武天皇吉野行幸のさい、詔に応じて作歌し、献呈されたものではないかと推測する。聖武天皇の即位は、神亀元年の二月四日であるが、このたびの吉野行幸は、「三月庚申朔、天皇芳野の宮に幸す。甲子（五日）、車駕宮に還る。」（続紀）とあり、即位

の翌月早速に行なわれたもので、たんなる清遊などではなく、新帝即位に関連する、ある種の政治的意味を持つものであったと考えられる。発駕の日が月改まった三月の一日であること、日程がわずか五日間であることにも、それは暗示されていると言えよう。

とすれば、このような行幸のさいに、儀礼歌が献呈されたと考えるのは、きわめて可能性の強い推測と言うべきであろう。もつとも、集中、この時の儀礼歌と見るべきものに、^{（注八）}「暮春の月、吉野離宮に幸す時^{いであ}」の、大伴旅人の作品（巻三・三一五―六）があるが、これは下注に「いまだ奏上を逕ぬ歌」とあり、実際に献歌されたものではない。吉野讃歌の原点に立ち帰り、人麻呂の作を踏まえて、宮と君とを楽天的に讃えたこの赤人の作品は、このさい新帝に献呈されたものとして、きわめてふさわしいとは考えられないだろうか。

もつとも、ここに言うこの行幸の政治的意味について、もう少し具体的に述べることが必要であろう。

聖武天皇の即位は、誰よりもまず、元明、元正二代の女帝が、長年にわたって待望していたところであった。このことは、聖武即位の宣命に見える両帝の発言内容によっても、きわめて明白である。しかし、聖武の即位には、一つの問題点があったと思われる。それは、母が文武天皇の夫人藤原宮子娘で、守旧派の貴族の反撥が予想されるといふ点である。従って、元明、元正両帝は、聖武を即位さ

せうる時期を注意深く待ち、また、積極的にそのような状況を作るべく努力する必要があった。元正天皇が改元、譲位の理由として、養老七（七二三）年九月に、左京の人、紀朝臣家の献じた白亀を、新らしい御代のために天地の賜わった祥瑞と理解した旨を述べている（聖武即位の宣命）のも、聖武の即位を可能ならしむるために、献上された白亀を活用したものと考えられる。

このような歴史的状況と作品の内実とにそくして、わたくしは別稿^{（注九）}で、養老七年夏五月の吉野讃歌、中でも車持千年の分担した一組（卷六・九二二―六）における相聞的表現を、都に残った皇太子（後の聖武）への相聞の情の表現と見、この行幸に、聖武の即位を可能ならしむるために、宮廷人の心を都の皇太子に帰一させようとする、元正女帝の政治的意図を汲み取ったのであった。そのさい、吉野が壬申の年の天武方結集の地であり、そのため、天武天皇によって皇位継承者決定の場として選ばれた前例のあったことが、わたくしの推論の一つの根拠であることも、すでにそこで述べた通りである。（天武の行幸は天武八八六七九〇年五月のことであったが、二つの行幸がおなじ五月であることも偶然ではなさそうだ。）

神亀元（七二四）年三月の行幸の持つ政治的意味をも、わたくしはこれとおなじ線上で考えたいと思う。すなわち、この行幸は、元正の行幸意図のいわば仕上げであり、宮廷の人心を、聖武新帝に帰

一させることをねらいとするものであったと見るのである。そして、宮ぼめと君ぼめを樂天的に歌った赤人のこの吉野讃歌は、この政治的意図にとって、きわめてふさわしいもののようにわたくしは思うのだが、読者のお考えははたして如何であろうか。

注一、岡部政裕氏「『ひとり』の系譜―赤人から家持へ―」（『上代文学 研究と資料―萬葉集を中心に―』八慶応義塾大学国文学研究会編、国文学論叢第四輯V至文堂）、および、同氏「長歌の盛衰」（学燈社「国文学」昭和四十九年五月号）参照。
注二、拙稿「吉野讃歌」（『柿本人麻呂―作品研究―』風間書房）参照。

注三、拙稿「山部赤人論」（『萬葉論序説』青木書店）参照。

注四、伊藤博氏「天平の宮廷歌人―吉野の赤人たち―」（『国文学言語と文芸』第四十一号）の注二参照。

注五、川口常孝氏「山部赤人」（『萬葉集講座第六卷』有精堂）参照。

注六、拙稿「養老の吉野讃歌」（『境田教授喜寿記念論文集 上代の文学と言語』その刊行会）参照。

注七、拙稿「不変への願い―赤人の叙景表現に就いて―」（『萬葉論集』桜楓社）参照。

注八、拙稿「旅人の宮廷儀礼歌」（『萬葉論集』桜楓社）参照。

注九、注六におなじ。

旅人の帰京行程

——宮本氏説に関連して——

林 田 正 男

はじめに

大宰帥大伴旅人が天平二年冬十二月大納言となり太宰府より帰京の途に就いたことは、万葉集中の題詞、左注、歌などによりよく知られている。しかしその帰京の行程については、明確でない点もある。それは旅人が帰京に際して、海路を取ったか、陸路を取ったか、又は陸路海路を併用したか。更に陸海併用の場合、何れより海路を取ったか、などの点が問題となるからである。勿論、太宰府は内陸の地であるから、何れより海路を取るにしても、ある地点までは陸行することは言うまでもない。しかしその間の陸行も二説が考えられる。一は、太宰府（筑前御笠郡）↓福岡市（筑前那珂郡）↓北九州市（豊前企救郡）を経て山陽道に通ずる行程である。これは令に規定する大路と称される行程を取るものである（厩牧令・令義解）。その二は、太宰府↓芦城（筑前御笠郡）↓嘉穂郡（筑前嘉摩郡）↓田川市（豊前田河郡）↓北九州市を経て山陽道に通ずる行程である。

これは所謂、田川（田河）道と称されるもので、太宰府より北九州に通う近路とされるものである。

次に旅人の帰京が、海路に依ったと見られる理由はどこにあるか。それは、卷三に載せる旅人の挽歌五首「過_二柄浦_一日作歌」（四四六）「四四八」「過_二敏馬崎_一日作歌」（四四九）「四五〇」の歌の趣によつて、諸注は多く海路に依り帰京したものと解している（全註釈・私注・注釈・その他）。しかしこれ等は、旅人が何れの港より乗船したか、詳しく考察されての結果ではない。ただ五首の歌の左注や歌の趣などをよりどころとして、諸注は略海路帰京説に一致しているようである。

旅人の帰京行程に就いては、その行程をやや詳しく考察された宮本喜一郎氏の論がある（『万葉』二十八号昭三三・七月「大伴旅人の帰京行程」）。氏は、井上通泰（『万葉集追攷』所収「芦城駅一・二・三」）の説に従つてこれを敷衍し、旅人の帰京は、前にみた田川道を取ったと主張されている。後半の行程に就いては、土屋文明

氏『旅人と憶良』の説に示唆を受け、前半陸路を取ったが、鞆の浦あたりから海路に転じたと考えられている。

本稿では、旅人の帰京行程が、所謂田川道を取ったか、鞆の浦あたりから海路に転じたか、などの点を中心として、宮本説に関連しながら具体的に卑見を述べる。

一

旅人の帰京に関連する贈答歌は多いが、芦城駅家の歌（巻四・五六八～五七一）と水城での贈答歌（巻六・九六五～九六八）の題詞・左注を次に示す。△歌は必要な部分は引用するが、他は省略▽

(一)大宰帥大伴卿被_レ任_ニ大納言_ニ臨_ニ入_レ京之時_ニ府官人等餞_ニ卿筑前国蘆城駅家_ニ歌四首（巻四・五六八題詞）

(二)冬十二月大宰帥大伴卿上_レ京時娘子作歌二首（巻六・九六五題詞）

右大宰帥大伴卿兼_ニ任_ニ大納言_ニ向_レ京上_レ道此日馬駐_ニ水城_ニ顧_ニ望_ニ府家_ニ于_レ時送_レ卿府吏之中有_ニ遊行女婦_ニ其字曰_ニ児嶋_ニ也 於是娘子傷_ニ此易_レ別嘆_ニ彼難_レ会拭_レ涕自吟_ニ振_レ袖之歌_ニ（巻六・九六六左注）

右の(一)(二)は、ともに旅人の帰京に関することを述べた記事である。一般には、(二)の記事により、水城から北上し福岡（博多）を経る大

旅人の帰京行程

路を取ったかに解されているようである。しかるに、前掲の宮本氏は、井上追放説に従って、次のように述べられる。旅人は一旦芦城で餞を受けて後に水城へ出たのではなく、水城を経て芦城に出たと考えられる。そして現在の地名でいえば、

太宰府↓水城↓阿志岐（以上筑紫郡）↓筑穂町↓庄内町（以上嘉穂郡）↓田川市↓香春町（田川郡）↓苅田町（京都郡）↓小倉区↓門司区（以上北九州市）

というコースを取ったとされる。この説に従えば、(二)↓(一)という順路を取ったことになる。しかし、(一)に対しては、出発当日、出発をここ（芦城）に送ったのでなく、出発前にこの地に出かけてわざわざ送別の宴が催された（全注釈、注釈その他）。とみる説がある。即ち出発前の予餞の宴での歌作であり、芦城は、帰京の順路には含まれていないとみるのである。

では、次に芦城駅家は、旅人の帰京のコースに含まれたか否かをみることにする。まず前掲の傍線Aの「臨入京之時」の「入京」について、集中の類似する表記を挙げる。

(イ)（巻十七・三九八九～九〇題詞）

大目秦忌寸八千島の館にして守大伴宿祢家持に餞する宴の歌二首（歌略）

右、守大伴宿祢家持、正税帳を以て京師に入らむとし、よりて

この歌を作りて聊かに相別るる嘆きを陳ぶ。四月廿日（同左注）。
 (四)（卷十九・四二五〇題詞）

すなわち大帳使に付し、八月五日を取りて京師に入るべし。これに因りて、四日を以て国厨の饌を介内蔵伊美吉繩麻呂の館に設けて饒す。ここに大伴宿祢家持の作る歌一首（歌略）

前の(イ)は、(イ)のすぐ前の同じ（卷十七・三九九五題詞）に「四月二十六日……家持に饒する宴の歌」とある。従って、この題詞により当面の(イ)の歌は、明らかに予饒会での歌作であることが知られる。

(四)は、明記するように、五日の出発にあたり四日にその饒宴が行なわれたのである。その他、（卷十八・四〇七〇左注）「京師に入るべく、因りて飲饌を設け饗宴す」。（卷十九・四二三八題詞）「守の館に会集し宴して作る歌」、（同左注）「正税帳を以ちて京師に入るべし」なども、出発前の予饒の会と思われるものである。芦城駅家の場合も「京に入らむとする時に、…芦城の駅家に饒する」という類似した対比表記である。従って、この場合も、その行程に就いた時と解する必要はない。むしろその反対に、集中の例からみれば、「入京」と「宴」を対比させた表記は、出発前の予饒の宴とみるのが穏当である。この旅人の送別の宴が、出発を送ったものでないことは、歌の内実からもいえる。それは、前掲(一)の陽春の歌に（五七〇）「大和辺に君が立つ日の近付けば」とあるによっても明らかで

ある（注釈）。因みに、家持にも類似した表現がある。（卷十七・三九九九）「都辺に立つ日近付く飽くまでに…」は、四月二十六日の詠であるが、四〇〇六題詞により出発は三十日以後であることが知られる。従って、この歌は出発以前のものである。この家持の類似した表現から類推しても、芦城駅家の歌が予饒の宴での歌作であることが知られる。

次に傍線Bの「向京上道」の「上道」についてみる。

(A)向京上道之時（卷三・四四六題詞）、(B)発帥家上道（卷六・九六三題詞）、(C)宅守上道作歌（卷十五・三七三〇左注）、(D)平旦上道（卷十九・四二五一題詞）

(A)は、旅人の歌であるが（四四八）に鞆の浦を過る日という左注がある。(B)は、坂上郎女が筑前国宗形郡の名見山を越える時のものである。(C)は、中臣宅守の歌であるが、（三七三〇）の歌に「み越路の手向に立ちて」とある。従ってこの歌は、都をあとにして、その旅の途次に詠んだものである。(D)は、その題詞につづけて「よりて国司の次官已下諸僚皆共に視送る。…」と述べ、その旅の行程に就いていることを示している。以上、(A)と(D)の集中の例からいって、水城の別れは、旅人が帰京の行程に就いた（…しようとする意ではなく、その行為が既に始まっているのである。）ものと見なければならぬ。さて、(一)が予饒の宴であり、(二)が帰京の行程に就いた時

のものであれば、大宰府政庁↓水城↓芦城という三角形を成す迂廻路の順路を想定する必要は、どこにもないことになる。

宮本説による行程に従えば、太宰府から芦城に出て、米山峠（三四一米）の山路を越え、嘉穂郡を過ぎ、豊前の田川に通ずることになる。私見もこの交通路の存在を否定するものではない。しかし文献に現われるところによれば、奈良時代、はたして官路（北九州に至る南路をとる近道）として万葉人が盛んに往来したか否か疑問がある。

まず第一に挙げるべきは、芦城駅家が延喜式には載せられていないことである。第二は、天平時代の芦城駅家は、太宰府から筑後や肥後方面に通ずる府側の第一番目の駅家ではなかったか（延喜式の長丘駅にあたる）と考えられることである。卷八（一五八一）に詠まれた芦城川は南方に流れ、旅人の詠んだ安の野（卷四・五五五、現朝倉郡夜須町）を経て筑後川に合流している。この地勢から見てもその可能性が強いが、今は詳しく触れない。^(注1)

さて、管見によれば、米山越の文献による初見は、宗祇の筑紫道記（九月十七日条）である。宗祇は長尾（嘉穂郡上穂波町長尾）より太宰府に来たのであるから、彼が越えたのは米山峠（あしき山といふ駅路）である。^(注2) 筑紫道記は、米山越えをしたことが知られる信頼に値する文献資料である。しかし次の点には注意しなければなら

ない。道記には、萬葉人がこの峠を越えたとは一言も記述していない。更に道記の記述は、万葉時代よりだいたい時代が下るので、これをもって萬葉時代を律することは出来ない、などの点である。しかるに近世の地誌類は、道記の記述の系譜に盲従、又はそれを歪曲して、あたかも上古の萬葉人がこの峠を頻繁に往来したかに解しているようである。^(注3) かく解される理由の一つには、藤原広嗣の乱の続紀の記事が、一つの示唆を後世に与えているのではないかと考えられる。次にこれに就いてみることにする。

二

田川道とは、天平十二年（八月～十一月）大宰少貳藤原広嗣の乱に出る名称である。

続紀十月九日条に、

又、降服へる隼人贈啖君多理志佐の申して云く、逆賊広嗣は謀りて云ふ、三道より往かむ、即ち広嗣は自ら大隅・薩摩・筑前・豊後等の国軍、合せて五千許人をひきゐて鞍手道より往き、綱手は筑後・肥前等の国軍、合せて五千人許人をひきゐて豊後国より往き、多胡麻呂（率ゐる所の軍数を知らず）は田河道より往むと。但し広嗣の衆の鎮所に到来くるとき、綱手・多胡古麻呂は未だ到らず。

とあるが、文献的には田川道の初見である。更に続紀は、広嗣が「遠河郡家において軍営を造り、兵弩を設け、烽火を挙げて国内の兵を徴発せんとした」（九月二十四日条）と記している。これは広嗣が、大宰少弐としての権限をもって、府管内の兵を召集しようとしたのであるが、その召集場所は太宰府ではない。これは、本稿にとって大変重要なことである。なぜなら、その召集場所が、前に示した遠珂郡家（現北九州市及び遠賀郡）であるからである。しかるに近世の地誌やそれを承けたその他の論考の中には、あたかも軍団兵士が太宰府に集結し、その一団が米山峠を越えて田川道より迫ったかのように解している。△これらは、史料をおおまかに扱った推定によるためか、又は、田川道という名称に引かれた付会によるものと考えられる。しかしこれは大きな誤解というべきである。

まず、田川道は、田川↓北九州を示す進路ではあるが、太宰府↓田川に至る順路を示すものではない。それは、軍団の内分けからもそのことがいえる。この記事を見ると、綱手の率いる筑後・肥前等の国軍が地域的には反対側の進路にあたる豊後より迫るといふ計画は何故であるか、広嗣の率いる軍団の内に豊後国軍があるが、豊後（道）でなく鞍手道をとっているのは何故か、など大きな疑問が生ずる。この記事は、要するに広嗣が、遠珂郡家であつた計画であつて、地域軍団の地理的条件や太宰府から北九州に至る行程には全然

関係がないのである。即ち(一)は筑前側より板櫃の陣（小倉区板櫃町）へ、(二)は周防灘に面した豊前側より板櫃の陣へ、(三)は(一)(二)の中間の田川方面より板櫃の陣へ、と三方より迫るといふ計画であつた。そしてこの計画は、板櫃の陣にほど近い遠河郡家の軍営で立てられた。しかし実際には、その計画の一部（豊後・田川）は、実行されなかつたのである。さて、以上にみたことの結論としては、続紀の広嗣の乱に出る田川道の記事は、太宰府↓米山（越）↓田川道↓北九州市に至る行程を示す証とはなり得ないということである。

豊前守宇努首男人歌一首

行き帰り常に我が見し香椎潟明日ゆ後には見むよしもなし（巻六・九五九）

宅努首男人は、題詞にあるように当時豊前国守であつた。^(注4)この歌

の「行き帰り」は、明らかに豊前国府から太宰府に往復することをいったものである。「常に我が見し」は、幾回となくそこを通過して香椎潟は馴染み深いものとなっているのである。豊前国府あたりから太宰府に通うには、所謂田川道をとるのが近道であるといわれる。しかるに公務を帯びた男人は、香椎の浦（福岡市）を通過して幾度となく太宰府に通っているのである。これは明らかに、所謂田川道の使用が、公用の場合を始めとして、一般的でなかつたことを示している。

陸路の場合、律令官人の京師と太宰府との往還は、山陽道を通つて北九州市→福岡市→太宰府という行程を取るのである。この行程は、令の規定する駅伝制からいっても合法的行程である（公式令・厩牧令その他）。集中には、駅使を送った時の大伴百代、山口若麻呂の歌（巻四・五六六～七）、大伴坂上郎女の帰京の途次の歌（巻六・九六三～四）など、福岡側の陸路行程を通っていることを示す詠歌がある。その他、巻七・十一・十二などに載せる作者未詳歌にも十九首ほどは、筑前福岡側に関連性をもつ歌である。^(注6)一方豊前国（田川方面）に関連する歌も二、三あるが、何れも行旅官人の詠で^(注7)はない。このように萬葉の歌枕の点からいっても、田川道の陸行が、一般的でなかったことを示している。

次に旅人の場合より時代は下るが、次の記事をみる。

小右記（右大臣藤原実資）寛弘二年七月十日条

六月十日巳刻。着_二水城_一、請_二取印鑰_一、午剋着_二府庁宿所_一。

夫木集 大宰大貳藤原高遠

筑紫にまかりたるに、水城の関に小貳府官などむかへに集り来たるによめる。

岩垣の水城の関に群れ迎ふうちの心も知らぬもろ人

この二つの記事は、ともに新任大貳を迎えた様を述べたものである。

この例から類推すれば、府の高官の送迎は水城で行なう慣行があつ

たと考えられる。旅人の場合の水城の送別もこれに準じて考えてよいと思われる。まして旅人は、帥兼任の大納言である。前掲(二)に示した左注の記事は、帥旅人を送る壮行のさまを最も妥当に叙述しているといえる。旅人は、水城で府吏の送別を受け福岡側の大路（令に規定する駅伝制を利用し）を陸行して、帰京の途に就いたのである。

三

続紀の次の記事（神龜三年八月三十日条）に留意したい。

太政官処分。新任国司向_レ任之日。伊賀。伊勢。近江。丹波。

播磨。紀伊等六国不_レ給_二食馬_一。志摩。尾張。若狭。美濃。参

川。越前。丹後。但馬。美作。備前。備中。淡路等十二国並給_レ

食。自外諸国。皆給_二伝符_一。但大宰府并部下諸国五位以上者。

宜_レ給_二伝符_一。自外随_レ便駕_レ船。縁路諸国。依_レ例供給。史生亦

准_レ此焉。

と諸国の新任国司赴任の供給を定めていることである。そして、大宰府に関しては、府の五位以上に伝符を給うとある。これによれば、府の五位以上の官人の京師との往還は、陸路を取るべきことを意味している。大宰帥である旅人もその例外であるはずはない。これは、旅人の帰京の四年前の神龜三年の太政官の官符であるから、旅人も

原則としてその規制のもとにあったと考えなければならない。式の規定（延喜式・卷二十三民部下）にも、大式以上は陸路を取ることが規定されているが、旅人の当時であっても、五位以上は、陸路を取るのが合法的行為であった。従って、当時、貴人陸行は常識であったと考えなければならない。

しかるに旅人の帰京行程に就いては、諸注は略海路（陸海併用を含む）を取ったことを認めている。この旅人の海路帰京説に対して、今日までに疑問が提出されたということ、私は寡聞にして知らない。しかし前の太政官符の記事を見れば、当然そこには大きな疑問が生ずるはずである。

諸注が海路説を取る理由の一つは、前にもみたように、帰京の途次に詠じた五首（卷三・四四六～四五〇）の挽歌にある。まずこの五首の歌の題詞左注にはどこにも「海路」とは記していないことに留意したい。ただ我々が歌の趣から海路を取っているのではないかと推定しているだけである。普通海路の場合は、題詞か左注にまとめて海路であることを記すか、各々海路を取っていることを明記している。たとえば人麻呂（卷三・三〇三題詞）「筑紫国に下る時に海路にして」を始めとして（卷四・五五七題詞、卷六・九六四題詞、卷十五・三五七八題詞、三七七八題詞、卷十七・三八九〇題詞）などのように海路であることを明記するか、歌本文に「熟田津に舟乗

り：」（卷一・八）、（卷三・二四六、三六六その他）のように、それと知られる表記がある。しかるに旅人の場合は、どこにも海路らしい表記がない。一方旅人に先だって、十一月に帰京の途に就いた坂上郎女（卷六・九六四）、倭從等（卷十七・三八九〇）には、それぞれ「向京海路」、「別取海路」の表記がある。以上の集中の表記例からいえば、倭從等の「別取海路」は、旅人との出発時の別と、陸路と海路の別をも含めた表記と解さなければならない（前掲宮本氏説）。

次に前にも一部触れたが、(二)の左注の「上道」は、集中に旅人の場合を含めて六例ある（卷六・九六三題詞、卷六・九九九左注、卷十五・三七三〇左注、卷十九・四二五一題詞、卷二十・四四〇四題詞）。しかるに集中の「上道」の例はすべて陸路をとる場合に限つてのみ用いられている。これも旅人が、陸路を取ったことを示す一証となる。

次に海路説がよりどころとしている五首の歌の趣であるが、趣といつてもそれは、「浦」とか「崎」の語句より感得されるものである。「浦」や「崎」の情景などを海路より詠じたものは多い。しかし海路からのみでないことは言うまでもない。^(注8)旅人の場合は「舟近づきぬ」「舟出」などのように明確に海路を示す辞句はない。我々には柄の浦や敏馬の崎という地名が内海航路に関連する著名な場所

あるという先入観がある。この先入観が、旅人が海路を取っていると感じさせるのである。つまりこれは、主観的な印象批評であって、海路説を決する証とはなし難いのである。この二つの名勝の地は、ともに陸路でも通過する土地である。従って、陸路の詠であつても一向に不都合はない。むしろ、集中の例からいえば「海路」とか「船泊」などと記さないことは異例となる。しかし本稿に取つては、それがかえつて側面から旅人が陸路を取つてゐることを証してくれ

る。
次に輓の浦あたりで、先の儂従等や坂上郎女などの一行と旅人が一緒に後半海路を取つて帰京したとみる説がある。^(注9) かく推定される理由の一つは、

延喜主計式、太宰府^{行程上廿七日。下十四日}海路卅日

とある所要日数にある。ところが、この海路三十日を国文学関係の人々の中には片道の日数と解している。^(注10) しかしそれは、大きな誤謬といふべきである。海路三十日の海路は、往復の日数を示したものである。^(注11) 海路は、片道でなく往復の日数が三十日というのが法定の所要日数である。従つて、坂上郎女や儂従等が輓の浦あたりで、旅人と一緒に後半海路をとつたとみる説は、日時の間からいつて成立しがたい。

むすび

大伴旅人の帰京行程に就いて、従来必ずしも明確でなかつた二三の疑問点を考察した。まず芦城の駅家の宴は、出発に先立つての予餞の宴である。旅人の出発は、府の正面口である水城からである。そこでは府官人をはじめ遊行女婦などを交えた人々の盛大な見送りを受けた。旅人の一行は、所謂田川道を取つたのではなく、神龜三年八月の太政官符の規定に従い、太宰府（筑前御笠郡）↓福岡市（筑前那珂郡）↓北九州市（豊前企救郡）↓山陽道と陸路行程を取つたのである。令に規定する大路の駅家、伝馬を利用しながら、天平元年四月、立派に駅舎の築造がなつた山陽道を陸行した。^(注12) そして、その途次、旅人は輓の浦や敏馬の崎に「立ち寄」つて、亡妻を偲び五首の詠歌を成した。この歌が海路による詠と解されるのは、総じて陸路の経過地の歌よりも内海航路の歌が多いこと、及び詠まれた題材による。しかし陸行の詠とみても題材としては、何の不都合もない。また萬葉の表記の通例である「海路」と記さないこと、及び「上道」の表記が、陸行に限つてのみ用いられている。かかる点から五首の歌は、陸行での詠と見るべきである。

以上、旅人は太宰府出発より終始陸路の行程を取り、おそらく天平二年の年内には京師の自宅に帰り着いたと思われる。

(注1) 芦城の駅家が、当時大宰府の官人達の清遊の地であったことは、(巻八・一五三〇〜一)、(巻四・五四九〜五五一)、(巻十二・三一五五)によって知られる。しかしそれが、旅人の帰京行程にすぐに結びつくとは限らない。

(注2) 伊藤常足『太宰管内志』、『宗祇旅の記私注』金子金治郎氏。貝原益軒の『筑前国統風土記』には、米山の峠路について、「谷中せばく両山せまるゆへに、泉声常に^{かまひす}聴し、猪鹿多し、」(穂波郡山口村の条)と記す。

(注3) 貝原益軒『筑前国統風土記』、同『筑前名寄』。伊藤常足『太宰管内志』。青柳種信『筑前国統風土記拾遺』。「芦城の駅とて、むかし宰府より、都へ行馬次の宿なり」(統風土紀)、諸書も総じてこのような紹介のしかたをしている。

(注4) 宅努首男人は、養老四年から神龜五年頃まで豊前国守であった(政事要略卷二十三所引旧記)。九年間豊前国守であったことは、通常の国守の任期としてはやや長い。

(注5) 豊前国府は、行橋市の南約五キロの豊津町のあたりであるという。

(注6) 『文学・語学』第七〇号昭四九・一月「萬葉集筑紫歌群素描——作者未詳歌群の性格——」拙稿。

(注7) 手持女王の挽歌(巻三・四一七〜九)。按作村主益人の歌(巻三・三一一)。技氣大首の歌(巻九・一七六七〜九)などがある。手持女王の詠は都でのものである。益人は、「村主」であるから帰化人の系統であり、大首も帰化系(私注説)でないかと考えられる。ともに都より下った官人であろうが、銅工・瓦工などの技術に關係し、幾年かをこの地で過したのであろう(豊前国風土記、延喜式・二十三民部下参照)。(注4)の宅努首男人も百済系の帰化人である。彼の国守の任期が九年というのも帰化人の有する技術に關係があるか。

(注8) 時つ風吹くべくなりぬ香椎瀉潮干の浦に玉藻刈りてな(巻六・九五八)、尾津の崎なる一つ松あせを(倭建命、記歌謡日本古典文学大系本番号二九)などは、海路より呼びかけた詠とみても自然である。しかし両者とも陸行のものである。

(注9) 『旅人と憶良』土屋文明氏。『萬葉』第二十八号昭三三・七月「大伴旅人の帰京行程」宮本喜一郎氏。『上古の歌人』日本歌人講座1所収「大伴旅人」高崎正秀氏。

(注10) (注9)の宮本・高崎氏の論。『大伴家持』山本健吉氏。『萬葉とその風土』森淳司氏その他。

(注11) 『古代の交通』 田名網宏氏、二二九頁、二四三頁。

(注12) 続紀、天平元年四月三日条。これについては、『上代駅制の研究』坂本太郎氏の論に詳しい。(注9)の宮本氏も坂本論文を引用して論じられている。

〈付記〉

昭和五十年十月二十五日成稿。本稿の成稿にあたり、井手至先生から色々と御教示を得ました。記して謝意を表します。

新刊紹介

小島憲之著

(塙選書 81)

古今集以前

— 詩と歌の交流 —

定価 二、四〇〇円

塙書房刊

富田大同編

古語拾遺漢字索引

古語拾遺漢字索引(続)

正統合せて 頒価 五〇〇円

限定五十部 送料 二〇〇円

申込先 兵庫県小野市鹿野町三〇七

(▽六七五―三) 編者宛

振替神戸一六五三番

憶良における陶淵明の影響の問題

——「貧窮問答の歌」をめぐって——

黒川洋一

一

「萬葉集における中国文学の影響については、古くは僧契沖の秀れた業績があり、近くは小島憲之博士による精密な研究がなされつつあると見受けられる。しかしながら、それらの研究の中には、中国文学の側から見ると、時には納得しがたいものがないではない。その一つに山上憶良の「貧窮問答の歌」(巻五)における陶淵明の影響の問題がある。

この問題を最初に学界に提出した人が誰であるか私は知らぬが、^①管見に触れるところそうした説をなすものとしては、西郷信綱氏の「萬葉私記第二部」(昭38・東大出版)・小島憲之博士の「日本上代文学と中国文学」(昭39・塙書房)・中西進博士の「萬葉の詩と詩人」(昭47・弥生書房)・「山上憶良」(昭48・河出書房新社)などを挙げることができる。なかでも中西博士のごときは、「貧窮問答歌」ばかりでなく、憶良のほとんどの作品が淵明の文学と深く関係する

と説かれている。こうした萬葉学者の見解に対して、中国文学の側からは吉川幸次郎博士の反論が提出されている。博士は「中国文学の日本における受け入れられ方」(筑摩書房版「吉川幸次郎全集」17)・「中国文明と日本」(同全集補巻1)において、淵明の詩が中国において評価されるのは、十二世紀、北宋の蘇東坡によってであり、それまでの淵明は詩人としては無名に近く、それをわが国の憶良が読んだはずはないと言う。

吉川博士の反論は、いずれも講演の形でなされたものであり、その議論はごく簡単に大筋だけを述べたにとどまるが、その議論には聞くべきものがあると考える。しかしながら、萬葉学者のなかには、吉川博士の反論にもかかわらず、依然として憶良における淵明の影響を言うものが絶えないかのごとくである。私があえてこの問題を取り挙げようとするのは、吉川博士の説を補強して、萬葉学者に再検討をわずらわしいと考えるがためである。

まず、「貧窮問答の歌」の全文を「日本古典文学大系」(岩波書

店)本の読み方に従って掲げてみる。

風雑へ 雨降る夜の 雨雑へ 雪降る夜は 術もなく 寒くし
 あれば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯酒 うち啜ろひて 咳
 かひ 鼻びしびしに しかとあらぬ 鬚かき撫でて 我を除き
 て 人は在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り
 布肩衣 有りのことごと 服襲へども 寒き夜すらを 我より
 も 貧しき人の 父母は 飢ゑ寒ゆらむ 妻子どもは 吟び泣
 くらむ 此の時は 如何にしつつか 汝が世は渡る
 天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる 日月は 明
 しといへど 吾が為は 照りや給はぬ 人皆か 吾のみや然る
 わくらばに 人とはあるを 人並に 吾も作るを 綿も無き
 布肩衣の 海松の如 わわけさがれる 襪褌のみ 肩にうち懸
 け 伏廬の 曲廬の内に 直土に 藁解き敷きて 父母は 枕
 の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂へ吟ひ 竈には
 火気ふき立てず 甑には 蜘蛛の巢懸きて 飯炊ぐ 事も忘れ
 て 鵲鳥の 呻吟ひ居るに いとよきて 短き物を 端截ると
 云へるが如く 楚取る 里長が声は 寝屋戸まで 来立ち呼ば

憶良における陶淵明の影響の問題

ひぬ 斯くばかり 術無きものか 世間の道 (卷五・八九二)
 世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

(卷五・八九三)

歌の全部を掲げれば以上のごとくであるが、この歌と淵明の詩との間の関係を説く代表的なものとして西郷氏と小島博士の説を紹介してみよう。西郷氏によれば、この歌は淵明の「飲酒」の其の十六の「竟に固窮の節を抱き、飢寒更る所に飽く。敝廬に悲風交り、荒草は前庭を没す。褐を披りて長夜を守るに、晨鶏は肯て鳴かず。」というのや、「風雨縦横に至り、収斂塵に盈たず。夏日長く飢を抱き、寒夜被無くして眠る。……已に在りて何ぞ天を怨みん、離憂目前に悽たり。」(「怨詩楚調、龐主簿遵鄧治中に示す」)や、「貧士を詠ず」の其の二の「竈をうかがうに」煙を見ず」などを下敷にして作られたものであることをくりかえし強調し、「これだけ見ても、陶詩が憶良の種本であることはほとんど疑う余地がない。」と述べておられる。また、小島博士は、奈良朝における「陶潜集」の伝来について慎重な態度を取られながらも、「貧窮問答の歌」と淵明の「貧士を詠ず」の詩との間には類似の句が十か所以上もあることや、冒頭の「風雑、雨降る夜の、雨雑、雪ふる夜は、すべもなく、寒くしあれば、……」と、淵明の「風雨縦横に至り、収斂塵に盈たず。夏日長く飢えを抱き、寒夜被無くして眠る。」(前出)との間の類想

などを指摘して、けっきょくは奈良朝における「陶潜集」の伝来を認めるべきであると主張しておられる。

三

憶良の詩における淵明の影響を言う代表的な説を紹介すれば以上のごとくであるが、これらの説が二人の間の関係を言う理由の主な点は二人の歌と詩との間には語彙の共通するものがあるということである。しかしながら、語彙の共通のみをもって、二人の間に影響関係のあることを認めようとするには問題がある。というのは、二人の歌と詩との間には、貧乏に対する意識の持ち方において、根本的な違いがあるからである。憶良は貧乏を悲惨なもの、いとわしいものとして捉え、貧窮者の口を藉りて、社会の不合理と不公正に對して、烈しく抗議しているのであるが、淵明の貧乏の捉え方は、そうした憶良のばあいとは、かなり異なった性格を持っている。もちろん、淵明にあつても、貧乏はいとわしく、つらいものであることには変わりはない。「会ること有りて作る」詩には言う、

弱年にして家の乏しきに逢い

老い至りて更に長に飢う

菽麦こそ実にも羨む所

孰ぞ敢えて甘肥を慕わんや

怒如は九飯に亜ぎ

暑さの当にも寒衣に厭く

歲月まさに慕わなんとす

如何せん 辛苦の悲しみを

……………

しかしながら、淵明にあつては、虚偽と企みの多い人生において、人間としての自由を守り、自己の信念に生きるためには、貧窮の生活に甘んずることも致し方のないことと考えられていたと思われる。

「飲酒」の其の十六には言う、

少年より人事罕に

游好は六経に在り

行く行く不惑に向んとするに

淹留りしも遂に成るなし

竟には固窮の節を抱いて

飢えと寒さと飽くまで更めぬ

敝廬に悲風交り

荒草は前庭を没う

褐を披きて長夜よながを守るに

晨鳥くたかけ 肯あえて鳴かんともせず

孟公 茲ここに在らざれば

終ながく以ために吾が情こころを翳くもらす

「固窮の節」の語は、「論語」衛靈公篇の「子曰く、君子固より窮す。小人窮すれば斯ここに濫みだる矣。」に拠るものであり、「窮」とは生活の窮乏を意味し、「節」とは自己の信念と理想を持ちつづけることを意味する。貧窮の生活にも挫けることなく、自己の信念と理想を持ちつづけることが、とりも直さず「固窮の節」である。^② 淵明はその「固窮の節」を守らんがために、自ら進んで飢えと寒さとに堪えたのである。

そうした淵明は、貧乏のつらさを嘆くとともに、貧乏ゆえに得ることのできる自由な生活の喜びをも、また一方では歌っている。

「貧士を詠ず」の其の一にはいう、

万族ものみな 各おのがし託たのむところあるに

孤雲ちぎれぐも 独よるべり依よぞなき

曖曖あいあいとして空中なかぞらに滅きえ

何いずれの時か余あまんの暉ひかりに見あわん

憶良における陶淵明の影響の問題

朝霞あさやけ 宿霧よぎりを開けば

衆鳥もろどり 相与うちつれて飛ぶに

遲遲ちぢたえり 林を出でし翮つばさ

未だ夕くれざるに復た来り帰る

力を量りて故轍を守る

豈いかでか寒こえかつ餓うえざらんや

知音ちいん 苟かりそめにも存あらず

已やんぬるかな 何の悲しむ所ぞ

かくのごとく、淵明にあっては、貧乏はかならずしも悲惨なもの、そこから脱出すべきものではなかったわけである。貧乏をいとうべきものとして、社会の不合理と不公正に対して烈しく抗議した憶良のばあいは、むしろ杜甫や白居易の詩に近いものがあると思われる。憶良の歌における淵明の影響を言うものには、こうした二人の文学の本質的な相違が忘れられていると言っている。ただ語彙が共通するということをもって、二人を結び付けようとすることは危険である。二人の語彙が類似するのは、二人がともに貧乏を主題にして歌や詩を作ったことから生まれていると考えるべきである。ほろとか、ひもじいとか、あばらやと言った言葉は、貧乏を主題にして歌えば自からに生まれるものであり、それをもって直ちに二人の間の影響

関係を言うことはできまい。

四

では、憶良は淵明の詩を全く知らなかったかと言えば、そうではない。憶良は淵明の作品のいくつかを知っていたに相違ない。何となれば、「文選」に淵明の詩が八首ほど収められているからである。

「文選」がいかに奈良朝人の愛読するところであったかは、僧契沖の「萬葉代匠記」を見られるがよい。契沖は「萬葉集」の歌における「文選」の投影を、あたかも掌中のものを取り出すがごとくに指摘する。その指摘には往々にして過度の穿鑿があるとしても、萬葉人が「文選」を愛読していたということは疑いえない事実である。いま、「文選」に収められる淵明の作品を掲げてみれば次のごとくである。

- 始作鎮軍參軍經由阿作一首（卷二十六）
- 辛丑歲七月赴飯還江陵夜行塗口作一首（卷十一）
- 挽歌一首（卷二十八）
- 雜詩一首（卷三十）
- 詠貧士一首（卷三十）
- 讀山海經一首（卷三十）
- 擬古詩一首（卷三十）

歸去來一首（卷四十五）

「萬葉集」の作家の中にあっても、随一の漢籍通であったと思われる憶良が、これらの作品を知らなかったと言うことはできまい。

また、「文選」とともに奈良朝人の机辺にあったものに唐初の歐陽詢の編になる「芸文類聚」があるとは、小島憲之博士の名高い説であるが、その中にも淵明の作品が幾篇か収められている。それを示せば次のごとくである。

- 祭從弟文（人五・友悌）
- 誠子書（人七・鑒誠）
- 赴飯還江陵夜行塗口作詩（人十一・行旅）
- 貧士詩（其二）（人十九・貧）
- 歸去來（人二十・隱逸上）
- 張長公贊（同右）
- 周妙珪贊（同右）
- 魯二儒贊（同右）
- 夷齊贊（同右）
- 尚長禽慶贊（同右）
- 自祭文（礼上・祭祀）
- 讀山海經詩（雜文一・讀書）
- 詠荆軻詩（雜文一・史伝）

雑詩 (産業上 田)

雑詩 (産業上・園)

飲酒詩 (食物・酒)

桃花源記 (菓上・桃)

五柳先生 (木下・楊柳)

憶良がこれらの書物により、「貧士を詠ず」などの淵明の作品の幾つかを知っていたことはほとんど疑う余地がない。しかしながら「貧窮問答の歌」が淵明の「貧士を詠ず」の詩をその下敷としているかと言えば、それにはやはり問題がある。何となれば、「文選」や「芸文類聚」に収められる「貧士を詠ず」の詩は、「文選」ではその七首の連作のうちの第一首のみにとどまり、また、「芸文類聚」ではその第一首と第四首のみにしかすぎないからである。それらの詩について見るかぎり、それらの詩と「貧窮問答歌」との間の関係を発見することは困難である。第一首の詩については、すでに先に引いたので、ここにはその第四首の詩のみを掲げてみる。

貧しきに安んじ賤しきを守る者

古より黔婁あり

好き爵も吾は栄とせず

厚き饋も吾は酬けず

憶良における陶淵明の影響の問題

一旦 寿命尽きぬれば

弊れたる服 仍お周らず

豈か其の極みを知らざらんや

道に非ず 故に憂無し

従来 将に千載ならんとするも

未だ復には斯の儔を見ず

朝に仁義とともに生きなば

夕に死すとも復も何をか求めん

「文選」・「芸文類聚」に収められる「貧士を詠ず」の詩は、かくのごとく内容は言うまでもなく、その語彙においても、「貧窮問答の歌」と全く似るところはない。

五

かくして、もし憶良が淵明の詩から影響を受けたとするならば、それは少なくとも「文選」や「芸文類聚」に見える詩からではなく、直接に「淵明集」からであったとせねばならなくなるが、残念ながらその可能性はほとんどないといってよい。何となれば、「淵明集」がわが奈良朝に存在した形迹は存在しないからである。

「淵明集」がいつのころにわが国にもたらされたかはよく分から

ぬが、それが九世紀の終わり、寛平年間にはたしかにわが国に存在していたことは、藤原佐世の撰になる「日本国見在書目録」に「陶潜集十」とあるのによつて知ることができる。しかしながら、それよりも少し早い時期に「淵明集」がわが国に伝えられていたことを示す資料がないわけではない。それは平安初期に撰せられたわが国人の漢詩集である「凌雲集」（八一四年の撰）に見える坂上今継の「詠史」と題する詩である。その詩には言う。

陶潜は世に狎れず

州里 塵埃に倦む

始めて幽棲の好きを覚え

長歌す 帰去来

琴中に唯だ趣を得

物外に已に懐を忘る

柳は掩う 先生の宅

花は薫る 処士の杯

遙かに南岳の径を尋ね

高く北窓の隈に嘯く

嗟 爾よ 千年の後に

遺声の一に美しき哉

幽棲を願つて「帰去来の辞」を作つたということ、無弦の琴を弾いて心を慰めたということ、五本の柳がその簷を掩い、杯に菊の花びらを浮かべて飲んだということ、廬山の山路を遙かに踏み分けて、淳朴の人に会うことを喜び、北の窓べに昼寝をして、夢の中で太古の人となることを喜んだということ、それらはいずれも淵明に關する名高い逸事であるが、この詩はそれらの逸事を取り合わせて、それらによつて象徴される淵明の高潔な人柄への思慕を表現したものである。

これらの逸事は、「南史」・「晋書」・「宋書」の本伝にも見えることとであり、それらの逸事が歌い込まれていることをもって、直ちに作者が淵明の詩集を読んでいたとするわけにはいかぬが、この詩がそうした淵明の多くの逸事を連らねた後に、「嗟爾よ千年の後に、遺声の一に美なる哉」と結ばれていることは注目し値いする。「遺声」とは死後の評判という意味であるとも解されるが、今日に伝わる彼の文学という意味にも解しうる。もし後者の意にこの言葉を解するならば、この詩は淵明の文学をほめたたえていることになる。今継は、淵明の高潔な人柄に対してばかりではなく、その高潔の人柄を反映する彼の文学に対する讚美者であつたかも知れない。

六

もつとも、平安朝以前においても、淵明に關係する資料が全くな
いわけではない。それは「懷風藻」に見える中臣人足の「吉野宮に
遊ぶ」という詩である。それには言う、

惟れ山にして且た惟れ水は
能く智にして亦た能く仁

万代 埃無き所にして

一朝 柘に逢いし民あり④

風波は転た曲に入り

魚鳥は共に倫を成す

此の地は即ち方丈なり

誰か桃源の賓なりと説わん

また、藤原宇合の「吉野川に遊ぶ」という詩である。それには言
う、

芝蕙 蘭蓀の沢

松柏 桂椿の岑

憶良における陶淵明の影響の問題

野客 初めて薛を披り

朝隱 暫く簪を投ず

笙を忘る 陸機が海

織を飛ばす 張衡が杯

清風は阮嘯に入り

流水は嵇琴に韵く

天高くして槎路遠く

河廻りて桃源深し

山中 明月の夜

自らに得たり 幽居の心

これらの詩は、ともに吉野の地が人里を離れた勝絶の地であるこ
とを言うものであるが、「誰か桃源の賓を説わん」や、「河廻って
桃源深し」の「桃源」の語は、言うまでもなく、一人の漁夫が、桃
の花びらを浮けて流れる谷川を遡って行ったところ、淳朴の境に行
き着いたという淵明の名高い「桃花源の記」にもとづく言葉である。
しかしながら、「桃源」の語は、理想境を意味する言葉として広く
使用されていたものであり、この言葉の存在をもって、宇合が直接
に「淵明集」を読んでいたという証拠とするわけにはいくまい。

また、同じく「懷風藻」に見える大津皇子の「春苑、言に宴すと

題する詩にも、淵明に言及する句が含まれている。その詩にはいう、

衿えりを開いて靈沼に臨み

目を遊ばしめて金苑に歩す

澄清 苔水深く

曖曖えんあい 霞峰遠し

驚波は絃と共に響き

唼鳥ろうちようは風と与ともに聞こゆ

群公ぐんこう 倒さかしまに載のって帰る

彭沢ほうたくの宴 誰か論ぜん

この詩の終わりの句「彭沢の宴は誰か論ぜん」の「彭沢」とは、

彭沢県の令（長官）であった淵明のことを言うに相違ない。この句について杉本行夫氏は、「あの真に詩酒を楽しんだ陶淵明のやうな

閑雅な宴遊の興趣を論ずる者は居らないものだなあ。」（「懐風藻註

釈」と解しておられるが、それでは一句は清遊を楽しむ者のいな

いことを嘆く言葉となり、宮廷の宴席の作としては不穏当である。

一句は、小島憲之博士が、「詩と酒にふけた彭沢の県令陶淵明の

催したような酒宴さえも、この御宴にくらべると論ずるに足らな

い。」（日本古文学大系「懐風藻他」と解されるごとくに、宮廷の

盛大さを讃えるものとするのが、恐らくは正しい。

ところで、もし小島博士のように解するのが正しいとするならば、

この句はむしろ大津が淵明の詩を読んではいなかったことを示すものであると言つてよい。というのは、そう解するならば、この句は

淵明を豪華な酒宴に耽った人として捉えていることになり、それは

淵明に対する大きな誤解と言わねばならないからである。この句は

恐らくは「淵明集」を読んで作られたものではなく、当時わが国に

おいて行われていた王勃の「春日の序」の「琴を横たえて酒に対し、

陶潜彭沢の遊」あたりからの転用と考えられる。^⑤けつきよく、憶良

が「淵明集」を見た可能性はまずないと考えて差し支えない。なお、

杉本氏は「曖曖霞峰遠し」の「曖曖」の語は、淵明の「貧士を詠ず」

の詩の其の一に「曖曖として空中に滅え、何の時にか余んの暉ひかりを見

ん」を意識するとする（前掲書）が、この二つを結び付けることは、

いささか強引に失する。

七

けつきよく奈良時代にはまだわが国に「淵明集」は入っていないな

ったと考えてよいが、それだけでは憶良が「淵明集」を見なかった

と決めてしまうわけにはいかない。というのは、憶良は七〇二年に

遣唐少録として唐土に渡り、何年間かをかの地に送った経歴を持つ

からである^⑥。ただそのことのみから考えるならば、憶良が「淵明集」に接した可能性がないとは言えまい。しかしながら、六朝から唐初にかけての淵明が、詩人としてはほとんど無名の人であったことを考慮に入れるならば、やはりその可能性は少ないと言ってよい。

もちろん、淵明はこの時代においても知名の士であることはあった。その事跡が「宋書」・「晋書」・「南史」の隱逸伝に見えるのは何よりの証拠である。しかしながら、それらの書物がすでに淵明を詩人としてではなく、隱逸の人として記述するごとく、淵明が名士であったのは、決してその詩が秀れると意識されていたためではない。梁の鍾嶸の「詩品」は、漢より梁に至る百三人の詩人を、上中下の三品に分類するが、淵明は中品の部に編入されているにすぎず、同じく梁の劉勰の「文心雕竜」は、古今の詩人を網羅して体系的な文学理論を構築するが、淵明の名はそのどこにも見出だすことはできない^⑦。

憶良が唐土に渡った七〇二年というのは、中国文学史上のいわゆる初唐と呼ばれる時代の終わりに当たり、ようやく新しい文学への胎動が生まれかけて来た時期ではあるが、この時期の文学の一般的傾向は、やはり六朝の美文学の延長の上であり、淵明の詩のごとき真率を旨とした文学の尊重された時代ではない。試みにこの時期を代表する詩人の一人である杜審言の「晋陵の陸丞の早春遊望に和す」

という詩を掲げてみよう。その詩には言う、

独り宦遊の人のみ有りて

偏に物候の新たなるに驚く

雲霞は海を出でて曙^あけ

梅柳は江を度^{わた}りて春なり

淑気は黄鳥を催し

晴光は緑蘋を転ず

忽ち古調を歌うを聞き

帰思は巾を沾^{ぬら}さんと欲す

と。

詩は、流謫の地に滞留して春に逢う情を歌ったものであるが、その言葉は絢爛たる美しさに溢れている。初唐において流行したものはかくのごとき美文学であり、淵明の詩のごとくに真率の文学ではない。伊藤正文氏が初唐期における淵明の地位について、淵明はこの時代にあつては、「単に隱逸詩人又は田園詩人との名称が与えられたのみで、文学史的潮流より除外され、孤立した特異な存在として黙殺に近い待遇を受けていた。」（「盛唐詩人と前代の詩人（下）——盛唐に於ける文学論の一面——」京大中文研究室編「中国文学報」

第十冊)と言っているのは正鵠を射た議論として評価されてよい。^⑧ そうした初唐の文学状況の中にあつて、憶良が淵明の文に学親しんでいたと考えることには困難があると言つてよい。

八

ことのついでに、中国における淵明の詩の発見について述べれば、それは憶良の在唐後数十年を経る盛唐から中唐にかけてのころであつたと思われる。このころになると、淵明の詩に言及するものがないにわかにその数を増してくるが、淵明評価の歴史の上で重要なものは、盛唐の杜甫と、中唐の白居易とである。杜甫が淵明の詩を高く評価していたことは、しばしば淵明を、六朝の大詩人として当時考えられていた謝靈運と並称して「陶謝」の語を用いていることによつて知ることができるが、^⑨「遣興」と題する五首の連作の第三首のごときは、その淵明理解の深さを示していると言える。その詩には言う、

陶潜は俗を避くる翁なるも

未だ必ずしも道に達せず

其の詩集に著すところを觀るに

頗る亦た枯槁なるを恨めり

達生 豈に是れ足らんや

黙識 蓋し早からず
子有り 賢と愚と
何ぞ其れ懷抱に掛けんや

陶潜、つまり淵明は、世俗を避けて隠棲した翁ではあるが、悟りの境地にあつた人物とは言いがたいふしがある。何となれば、その詩集にあらわれている言葉を觀察するに、相当に貧乏を苦しめてゐるからである。これでは、達生、つまり生死の理を十分に悟つていとは言えぬし、黙識、つまり心に道を悟ることにおいても遅かつたと言えよう。また、彼は子供の賢愚を気にする詩(「子を責む」)を作っているが、そんなことは気にする必要のないことではないか。詩は、超然たる隠者であるはずの淵明の詩が、時にはなほだ人間的な苦悩をのぞかせていることをいぶかるものとして読まれぬでもないが、そう読むのは恐らくはこの詩の真意を得てはいないであろう。詩は、淵明は悟りすました超俗の人ではなく、数々の人間的な迷いと、悩みの中にあつた人なるがゆえにこそ、おのれはその人に共鳴を覚えるということであるとして読まれるのがよいであろう。もしそうだとするならば、杜甫の淵明理解には、なかなか深いものがあつたと言わねばなるまい。

杜甫について、淵明の文学を高く評価した人は、中唐の白居易で

ある。白居易は、九江郡の司馬に左遷されていた時、廬山にある淵明の故宅を訪れているが、その折の作「陶公の旧宅を訪ぬる詩」には言う、

我は君の後に生まれ

相い去ること五百年なり

五柳の伝を読む毎に

目は想い心は拳拳たり

昔嘗て遺風を詠じ

著わして十六篇と為せり

今来たりて故宅を訪ぬるに

森かにも君は前に在るが若し

樽に酒有ることを慕わず

琴に絃無きことを慕わず

慕うは君の榮利を遺れて

此の丘園に老死せしことなり

おのれは早くから淵明の人柄と、その詩とを愛し、かつて淵明の詩体に摸した十六首の詩を作ったことがある。今、はからずも淵明の故宅を訪ねて淵明を偲ぶ機会を得たが、おのれが淵明を景慕する

のは、樽に満ちた酒を酌んで浮世を忘れたというその超俗の生活でもなければ、無絃の琴をもてあそんで忘我の境にひたつたというその高雅な生活でもない。景慕してやまぬのは、淵明が世俗の榮利を棄てて、この淳朴の田園にその生涯を終わったことにある。

淵明が、古今の大詩人としての地位を確立するのは、淵明をもって空前絶後の大詩人として絶賛し、そのほとんどの詩について和韻した北宋の蘇軾（東坡）の力に負うところが大きいわけであるが、杜甫と白居易は、それに先立つこと三、四百年にして、すでに淵明の文学に高い価値を認めていたということができる。私は先にわが平安初期の「凌雲集」に見える坂上今継の詩に、直接に「淵明集」を読んだらしい形迹を見出だしうるということを述べたが、それもこうした唐土における淵明の詩の発見を、いち早く反映するものであったと言ふことができよう。

九

けつきよく、憶良が「淵明集」を読んで、それに共感し、その影響のもとに、「貧窮問答の歌」を作ったとする可能性は、はなはだ乏しいとしなければなるまい。西郷氏らの言う二人の語彙の類似も、憶良が淵明を学んだことによるものではなく、二人がともに貧乏を主題としたことによると考えるのが、より妥当であると思われる。

もし語彙の類似をもって関係を論ずるならば、憶良に影響を与えた唐土の詩人として考えられるものは、ひとり淵明のみにはとどまるまい。土屋文明氏が、かつて「貧窮問答歌と貧家賦」(「アララギ」四九卷二号)という文章において指摘されたことのある晋の束皙の「貧家賦」をもまた挙げる事が可能である。それは「文選」には見えず、「芸文類聚」三十五、人部十九の「貧」の条に見えるが、それには次のように言う、

余は家の轆軻に遭い

六極の困屯に嬰り

恒に身を勲しめて以て勞思し

飢寒の辛苦に丁う

愿憲の厚德無きも

民斯の下貧有り

漏狭の草屋有るも

蔽覆の塵を受くる無し

唯だ曲壁の常に在りて

時に弛落して圧鎮し

草葉を食いて飽きず

常に膳珍に噉噉たり

孟春の季月に涉り

仲冬の堅氷に迄ぶ

稍々煎蹙して窮迫し

衣褐の以て身を蔽う無し

還た牀に趨りて被無く

手は狂おしく攘いて妄りに牽くも

何ぞ夜長の暁け難きや

心は咨嗟して以て天を怨む

責家至りて相い敦く

乃ち東に取りて西に償い

行きて貸るを乞えども処無く

退いて影を顧みて以て自ら憐れむ

葉を銜い売るも售れ難く

遂に前みて飢年に至る

黄当の草菜を煮

汪洋の羹饘を作る

釜は遅純して沸き難く

薪は鬱拙して然えず

日中に至るも熟さず

心は苦苦して飢懸す

丈夫は堂上に慨き

妻妾は竈間に嘆く

悲風は左側に噉び

小児は右辺に啼く

この「貧家賦」は、一世紀初めの揚雄の「逐貧賦」にはじまる貧賤文学の伝統の上に立つものであるが、土屋文明氏は「妻妾は竈間に嘆く」、「小児は右辺に啼く」の句は、憶良の「父母は枕の方に妻子どもは足の方に」に類似し、「釜は遅純にして沸き難く、薪は鬱拙して然えず」の句は、「竈には火氣ふき立てず」に影響を与え、「丈夫は堂上に慨く」の句は、「我を除きて人は在らじと誇ろへど寒くしあれば」の気概に相い通ずるものがあり、また、「まげ廬」のごとき特殊な語は、この賦の「曲壁」より得来たった造語ではないかと思われると言ひ、その結論として「私は憶良が貧窮問答歌の製作に当って、此の束皙の貧家賦が、彼の頭の中にあり、いはば粉本となったということは疑ふ余地がないものと信ずる。」と論じておられる^⑩。

はたして土屋氏の言われるごとくに、憶良の「貧窮問答の歌」が束皙の「貧家賦」を模したものであるかどうかは分からぬが、「貧家賦」と「貧窮問答の歌」とのあいだには、語句の上における多く

の共通性があることは否定できまい。もし語句の類似の上から言うならば、淵明の詩よりはこの束皙の賦の方が、憶良の歌にはるかによく類似していると言つてよいわけである。

十

かくのごとくに考えてくるならば、憶良の「貧窮問答の歌」に淵明が影響を与えているとする中西博士らの説は、はなはだ危険な推論と言わざるをえない。もちろん、憶良が「淵明集」を見た可能性が全く無いというわけではない。可能性としてはそれもまた有りうるわけである。しかしながら、その可能性はきわめて乏しいと言わなければなるまい。それにもかかわらず、なお憶良が「淵明集」を読み、その詩に共感し、その影響の下に「貧窮問答の歌」を作ったと主張されるのであるならば、そのときには如上のことを十分に承知の上で論を立てられなければなるまい。またそのときには、そのことの持つ意味の重大さにも言及されなければなるまい。というのは、もしそうだとするならば憶良は杜甫に先立つこと数十年にして、淵明の詩の価値を発見し、それに共感していたということになるからである。それは日本人の秀才性を、きわめて早い時期に示すものの一つとして、重大な意味を持つと言わなければなるまい。しかしながら、その可能性は残念ながらきわめて乏しいと、私は考える。

なお、ついでに気の付くことを言えば、この歌の反歌「世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」に加えられた契沖の注である。それには次のごとくに言う。「ヤサンとは論語云、那有道貧且賤焉、恥也、此意ナリ。飛立カ子ツは毛詩柏舟云、静言思之、不能奮飛、魏文帝雜詩云、飛安得翼、欲濟河無梁。」

〔萬葉代匠記〕卷之五下）まことに驚くべき博識であるが、「飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」という表現が、「詩経」邶風の柏舟の詩の「静かに言に之を思えども、奮飛すること能わず」を意識するという指摘は注意されなければならぬ。何となれば憶良は萬葉歌人の中にあっても有数の思想家であり、儒学の經典の一つである「詩経」が彼の教養の重要な部分を占めていたであろうことは疑いえないからである。「飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」という表現が、「詩経」の詩句を意識すると考えることは決して穿鑿に過ぎるとは言えないであろう。¹²⁾しかるに近代の注家は、ことごとくこの契沖の説を無視しているのは、いったい何故であろうか。国文学研究者の再考をわずらわしたい。なお、陶淵明の詩の訓み方は斯波六郎博士の「陶淵明詩注訳」（昭26・東門書房）の親切なるのによった。（五〇・九・一二）

注 ① 小島憲之博士によれば、「貧窮問答歌」と淵明の詩との関係

を指摘するものとして、杉本行夫氏の「萬葉集歌と中国韻文」
「萬葉集大成」7や、清水房雄氏の「貧窮表現の一類型」〔アララギ〕四九卷六号）などがあると言う。（「上代日本文学と中国文学」中）

② 一海知義氏の「陶淵明」（筑摩書房版「世界古典文学全集」25）の「固窮節」の注（七九ページ）によれば、淵明はこの言葉を、「論語」の原義に加えて、「窮を固る」の意味を持たせて使っており、その古い用法としては、戦国期のものとされる「尸子」に、「道を守り窮を固れば、則ち王公を軽んず。」というのがあると言う。なお、淵明には「固窮」の語の用例がこの他に四例ある。

③ 平安初期の漢詩文の中には、淵明に関係するものが、このほかにいくつも見られるが、それらはいずれも他の書物から容易に得られるものばかりであり、それらをもって「淵明集」が平安初期に存在した証拠とするわけにはいかぬので本文中には挙げなかったが、試みに「経国集」の中から淵明に関係するものを掲げれば、次のごとくである。(i)嵯峨天皇の「重陽節の菊花の賦」に「陽に桓景に随いて古を訪い、陶潜に就いて以て觴を命ず」とあるが、「陶潜」はいままでもなく淵明のことである。(ii)同じ作者の「雑言、九日菊花を翫ぶ篇」に、「人物は嵯

跼として皆な変衰す、如何ぞ仙菊の東籬に笑う」とあるのは、淵明の「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る」を意識するものである。(ハ)源明の「芳菊を翫び、幾芬芬たり。延寿時に浮かぶ王弘の酒、空しく嗟く把に盈ちて夕陽の曛ずるを」(「雑言、九日菊花を翫ぶ篇、製に応ず一首」)の「王弘の酒」は、淵明と王弘の二人が菊花を汲みかわしたという「続晋陽秋」の故事にもとづくものである。(ニ)滋善水の同題の詩の「岸色早く滋し朝夜の露、余香把に盈ちて陶元に随う」の「陶元」は、陶元亮、つまり淵明のことである。

④ 「万代無埃所、一朝逢柘民」の訓みは小島憲之博士の説(岩波書店刊「日本古典文学大系」の「懐風藻」)に従った。博士の訓みは、「この吉野は昔から万代に亘って塵埃のない所で、かつて柘枝媛に逢合した民(美稻)のいたところである」と解されたものであるが、博士は別に「逢柘民」は「柘民に逢ふ」、つまり柘枝伝説の民(吉野の民)に出会ったと訓む可能性をも持つとされ、もしそうよむのがよろしいとするならば、「逢柘民」は、淵明の「桃花源記」を意識するかも知れぬとされている。しかしながら、「柘」は、別本は「招」に作り、それに従うのがよいと思われるので、「柘民に逢う」と「桃花源記」との関係についてはここではこれ以上は触れぬこととする。

⑤ 王勃の詩文集が奈良朝にわが国に存在したことは、正倉院にその「詩序」の残巻が伝わることによって明らかである。

⑥ 憶良が遣唐少録として瀋唐したのは、大宝二年(七〇二)の晩夏のことであるが、その帰国がいつであったかは明らかではない。中西進博士の推定によれば、それは慶雲四年(七〇七)の晩春であったであろうと言う、(角川書店刊「山上憶良」)もしそうだとすれば、憶良の滞唐期間は、ほぼ四年六か月であったことになる。

⑦ 明刊本の「文心雕竜」隠秀篇には、「士衡の□□、彭沢の□□は、心密に語澄みて、俱に壯采に適す。如し秀を弁せんと欲すれば、亦た惟れ句を摘む。云々。」とあり、彭沢、つまり淵明への言及が見られるが、この部分が明人の偽作であることは、すでに定説となっている。なお、「詩品」における淵明の品第については、高松亨明氏の「詩品詳解」(昭34・中国文学会)の「詩品研究」に詳説がある。

⑧ 伊藤正文氏によれば、初唐期における淵明への言及としては、高宗に一例、盧照鄰に三例、王勃に二例、楊炯に一例、王績に数例があるにすぎぬと言う。(「盛唐の詩人と前代の詩人」下)

⑨ 淵明を謝靈運と並称する杜甫の用例としては、「優游するは謝康楽、放浪するは陶彭沢」(「石櫃閣」)、「焉んぞ思いの陶謝の

手の如くなるを得て、渠をして述作せしめて与に同じく遊ばん」
 (「江上に水の海勢の如くなるに値い、聊か短述す」)、「陶謝は
 枝梧せず、風騷は共に推激」(夜、許十一の詩を誦するを聴き、
 愛して作有り)」がある。

⑩ 汪紹楹の校合になる中華書局本(一九六五)によったが、「御
 定歴代賦彙外集卷第十九に収める同賦は、八句目と九句目の間
 に、「欲恚怒而無益、徒怫鬱而独嗔、蒙乾坤之徧覆、庶無財而
 有仁」の四句が挿入されている。また、「曲壁」は「四壁」に、
 「責家」は「債家」に、「銜売葉」は「銜売業」に、「鬱拙」は
 「鬱紕」に作っている。

⑪ 土屋文明氏は、「芸文類聚」には、東哲の作品として「貧家
 賦」以外にも「勸農賦」(産業部農類)が収録されていること
 を指摘し、その中の「若場功畢組輸至、録社長召閭師」という
 句が移転して、「しもと取る 里長が声は」になったのかも知
 れぬと述べておられる。

⑫ 吉川幸次郎博士の「中国文学の日本における受け入れられ方」
 (前出)には、「天地は 広しといへど 吾がためは 狭くやな
 りぬる」は、「詩経」小雅、正月の「天を蓋し高しと謂うも、
 敢て曲ままずんばならず、地を蓋し厚しと謂うも、敢て躋こせずん
 ばならず」を意識するであろうとある。

大仏開眼会の漢詩

蔵中進

一

天平勝宝四年（七五二）四月九日、九年の歳月と巨大な富を注ぎ込んで完成にとめた東大寺盧舎那大仏は、ほぼその偉容を整えて、盛大な開眼供養会が行われた。孝謙天皇をはじめとして、すでに五十路を越えて心身ともに衰えを見せはじめていた聖武太上天皇、光明太后らは、この国はじまって以来の盛儀に、おそらく胸をときめかせつつ親臨したことであろう。

『統紀』には、この日の盛儀が、簡潔ではあるが要を得て、次のごとく記述されている。

（天平勝宝四年）夏四月乙酉（九日）、盧舎那大仏像成、始開眼、是日行幸東大寺、天皇親率文武百官、設齋大会、其儀一同三日、五位已上者著礼服、六位已下者当色、請僧一万、

既而、雅楽寮及諸寺種々音楽並咸来集、復有王臣諸氏五節、久米儻、楯伏、踏歌、袍袴等歌儻、東西発声、分庭而奏、所作奇偉不可勝記、仏法東帰、齋会之儀、未嘗有如此之盛也、是夕、天皇還御大納言藤原朝臣仲麻呂田村第、以為御在所、

これによると、当日の開眼供養会は、元日拝朝の儀と同じように、文武百官も礼服を着けて参列し、一万人にも及ぶ僧侶たちが招請され、雅楽寮、諸大寺の楽師たちもことごとく来集して、種々の音楽、歌儻などが大仏前庭にくりひろげられたのであった。まことに『統紀』の記すように、「仏法東帰、齋会之儀、未嘗有如此之盛也、」であり、その「奇偉不可勝記」ものがあつたに相違ない。そして、この盛儀を当代の文学は、どのように受けとめ、どのように形象化したのであろうか。

『懷風藻』はその序文によると、すでにこの前年の天平勝宝三年（七五一）冬十一月には成っていて、当然のことながら時間的にかかりをもつことが不可能であった。そして『萬葉集』は、作歌日付の判明する最下限天平宝字三年（七五九）正月一日の大伴家持の作（二十・四五五六）まで、あと七年の歳月を残しているにもかかわらず、大仏開眼会に関しては一首の歌をも残していない。この頃大伴家持は、足かけ五年にわたる越中国守の任を終えて、天平勝宝三年（七五一）秋以来、平城京にあって少納言に任ぜられて宮廷に出仕していた。おそらく四月九日の開眼供養会には、多数の官人たちの中にあつて従五位上の礼服に身をかためて参列していた筈であるが、この日はさむ前後には作歌なく、大仏開眼に関しては全く無感動、あるいは無関心であつたかのごとくである。

北山茂夫氏は、この頃の家持の動静について、次のように推測しておられる。

上皇は、健康のすぐれないこともあつて、しきりに、大仏の完成をいそがせていた。三月に像への塗金が始まり、ようやく四月の開眼会にこぎつけた。（中略）開眼の儀は、九日であるが、四日から諸儀がはじまつており、六日には、「鎮裏京使」が特設され、大伴稻公、中臣清足ら四名がその任につき、兵士四〇〇人をもつて警備にあたつた。家持には特別の式役がな

つたようであるが、少納言として繁忙の六日間をすごしたにちがいない。越中在任の日に、「詔書を賀く歌」を作つたかれは、「仏法東帰より、齋会の儀、未だかくの如く盛んなるはあらず」（『続日本紀』）といわれた大仏開眼会に列して、歌日誌には、それに關する自他の歌は一首も記していない。⁽¹⁾

いわば当代の朝野をあげての盛儀であり、同時にまた衆庶の血と汗の結晶ともいふべき盧舎那大仏の完成に關して、家持をはじめとする萬葉末期の歌人たちは、何故に口を緘して歌わなかつたのであろうか。——大仏開眼会などは、萬葉末期歌人たちの歌心をかきたてるに足る性質の事件ではなかつた。あるいは家持をはじめとする萬葉末期歌人たちの所属した中下層官人たちにとって、それはむしろ繁忙と煩瑣とに追い廻されただけの虚儀であつたから、というべきかもしれない。板橋倫行氏は、この点について次のごとく述べておられる。

なるほど初期の萬葉歌人は国家と天皇一族の哀歎を身をもつて歌つた。しかし萬葉後期の歌人にはこういう公共的な題目は詩魂をもやす材料ではありえなかつた。かれらは公共的なものよりも私的な風流の世界に心を傾けた。大仏造営やその開眼法会という国家的事業に萬葉歌人の関心が向けられなかつたのは、あまりにも当然であつた。⁽²⁾

従うべき見解であるが、同時におそらく神亀・天平の頃から、歌の公的な場における位置が、すでに詩にあげ渡されつつあった時代的趨勢と無関係ではあるまい。宮廷あるいは社寺などにおける公的行事にあつて、特定の歌人による作歌はもはや求められることが稀少となり、むしろ唐風模倣の風潮が強くなり推し進められるにしたがつて、詩を求める方向に流れが大きく変つてきつつあつたのである⁽³⁾。ただ、『萬葉集』に収録されることはなかつたが、『東大寺要録』⁽⁴⁾（卷二）には、「東大寺大会時、元興寺献歌二首」と題する歌三首と、「御作」と称する歌一首の計四首が収録されている。また同書には「供養舎那仏歌辞」という題の下に、七言排律一首、五言律詩一首并序、七言律詩一首、合計三首の詩も収録されていて、われわれの目をひく。

従来、これら大仏開眼会に関する文学作品については、あまり注目されることもなく、したがつてこれらの作品個々に存する問題点についても、集中的に論ぜられることはほとんどなかつた。いわば忘れられた大仏開眼会の文学のうち、ここには序を含む漢詩三首に照射を試み、『懷風藻』以後、『萬葉集』最晩期の時代の文学に関する諸問題について考察してみようとするものである。

二

『東大寺要録』卷二（供養章第三）の「開眼供養会」の記述によると、天平勝宝四年（七五二）四月九日の行事の詳細は、次のごとくであつた。

九日。太上天皇。太后。天皇。座東大堂布板殿。以開眼。其儀式並同元日。但無侍從。亦堂裏莊嚴種種造花。美妙繡幡。堂上散種種花。東西懸繡灌頂八方懸五色灌頂。其先請複位已上僧。自南門直參入。

次開眼師。僧正菩提法師。乘輿捧白蓋自東入。

次講師。隆尊律師。乘輿差白蓋自西入。

次読師。延福法師。乘輿差白蓋自東入。

並着堂幄。即開眼師進前仏。取筆開眼。亦筆着繩。令參

集人等開眼了。即講讀共登高座講說花嚴經。請衆僧沙弥

等。自南門左右頰以參入。

着東面北幄。即大安藥師元興々福寺四寺。献種種奇異物。

繼自南門柱東。亦烈種種樂參入。

勅

大歌久米頭々舞

楯伏舞

左大臣已下擊鼓十六人

妓樂鼓擊六十人

唐散樂

唐中樂

唐古樂

高麗樂

度羅樂四寺行道二反廻畢。左右頒立於堂前

以次第奏 大歌女 大御舞卅人 久米舞

楯伏舞卅人 女漢躍歌百二十人

跳子名百人 唐古樂一舞 唐散樂一舞 林邑樂三舞 高麗樂一舞

唐中樂一舞 唐女舞一舞 高麗樂三舞 高麗女樂

同日夕入座東宮⁽⁴⁾

これによると、当日の主たる行事は、勿論完成したばかりの盧舍那大仏像開眼の儀式を行うことにあったのであるが、同時に付随行事として、隆尊律師を講師とする『華嚴經』の講説が行われ、更に大仏に手向けるための大アトラクションとして、大歌、久米舞、楯伏舞等々のわが国伝来舞樂をはじめとして、大陸・半島諸国からの渡来舞樂たる唐散樂、唐中樂、唐古樂、高麗樂、度羅樂、林邑樂等々が花やかにくりひろげられたのであった。北山茂夫氏は、これに

ついても次のように述べておられる。やや長文になるが、右に引用した『東大寺要録』の文にもとづいておられるように見うけられるので、煩をいとわずに示すことにする。

開眼の導師は東から堂にはいり、盧舍那大仏のまえにあらわれ、筆をかゝげておごそかに開眼のことをとりおこない、筆になわをつけて参集の人々がそれを手にとった。講師読師はともに高座にのぼって、堂にあふれた貴顕衆僧に、華嚴經の講説をおこなった。

あとは仏事につきものの歌舞がきらびやかに演ぜられ、音楽は金堂になりひびいた。雅楽寮や諸大寺の音楽がすべてこゝにくり出され、五節の田舞、久米舞、楯伏舞はいうまでもなく、唐・高麗・度羅・林邑の、さまざま舞樂がもよおされ、左大臣諸兄をはじめ皇族や官人もそれに参加した。(中略) 蓮華蔵の世界がともかくも王者の悲願そのまま、に東大寺盧舍那大仏——国分寺釈迦像という、うつし世の形式をそなえてかたちづくられた。傾きくずれかゝろうとする天皇政治を、そうした人間以外の力で、しかも造仏の行為をとおして必死にさゝえ、往時の盛世にもりかえそうとしたのである。⁽⁵⁾

『東大寺要録』のこの章に載せる「供養舎那仏歌辞」と題する漢詩三首について検討してみよう。いまこれらに番号を付して(1)詩

く(3)詩までとする。はじめに(1)詩の本文を掲げると次のごとくである。

(1)有一蓮花香水海 分十世界滿無辺

每華頭身敷妙理年 触処示説啓芳縁程

工 三明菩薩智恵眼 能滅衆生業障纏

我皇称讚舎那徳 群臣舞蹈法堂前

未見珍花開綵色藏 非常宝樹覆香煙絵

以茲修繕施百姓 忠心転潔共承天

宗社不傾連万代 重雖難継日照千年(6)

みられるように、詩は整然たる七言排律の形式をとり、下平先韻および仙韻によって押韻されている。

第一・二句の「有一蓮花香水海 分十世界滿無辺」については、すでに家永三郎博士に論があつて、これらの語句は『華嚴経』華嚴世界品にもとづくものであることを指摘しておられる。⁽⁷⁾即ち、この時の聖武天皇の大仏造頭発願の思想的背景について、小野玄妙博士が『梵網経』の教理にもとづくものとされたのに対して、『華嚴経』本尊説を提起して、その論拠の一つにこの詩句を示されたのであつた。⁽⁸⁾確かに『華嚴経』華嚴世界品には、

…莊嚴香水海。此香水海。有大蓮華。名種種光明麝香幢。華嚴莊嚴世界海。…

大仏開眼会の漢詩

…世界大海無有辺。宝輪清淨種種色。…

…此世界海大地中。有不可説。仏刹微塵数香水海。一切妙宝。

莊嚴其底。⁽⁹⁾

などの語句があつて、これらにもとづくものであることは確實といつてよいであろう。

また、これも家永三郎博士によつてすでに指摘されていることであるが、思託の『延暦僧録』第五に収める「東大居士伝」(『日本高僧伝要文抄』所収)には、

…即以平⁽¹⁰⁾山鑄⁽¹⁰⁾浮攄王刹香水海中世界種蓮華嚴世界盧舎那仏。

とあつて、この場合も『華嚴経』によつていとみてよく、両々あいまつてこの詩句の出典を確かなものとしている。

第三・四句の「每華頭身敷妙理 触処示説啓芳縁」は、校異に示したように『続々類従』本との異同が甚しいが、筒井校訂本の本文に従うべきである。またこれにつづく第五・六句「三明菩薩智恵眼 能滅衆生業障纏」も本文に異同があるが、筒井校訂本の本文に従うべきである。これら第三句、第五句の場合も、『華嚴経』の教理にそつて展開されていると目されるが、むしろ『梵網経』の、

是時、釈迦即撃接此世界衆、還至蓮花台藏世界、百万億紫金剛光明宮中、見盧舎那仏、坐百万蓮花、赫赫光明座上。時釈

迦仏、及諸大衆、一時、礼敬盧舎那仏足下已。釈迦仏言、此世界、地及虚空一切衆生、為何因何縁、得成菩薩十地道。当成仏果、為何等相、如仏性本原品中、広問一切菩薩種子。(下略)

爾時、蓮花台藏世界、盧舎那仏、赫赫大光明座上、千花上仏、千百億仏、一切世界仏。是座中有一菩薩、名華光大智明菩薩。

(下略)⁽¹¹⁾

などを節略したもの、と見るべきではあるまいか。

周知のように、『梵網経』もまた、蓮華台藏世界を説く經典であつて、『華嚴経』とは、いわば姉妹關係にあり、わが奈良朝仏教界において広く崇信された經典であつた。さきにも記したように、東大寺盧舎那大仏造願の思想的基盤として『梵網経』の教理を提示されたのは小野玄妙博士であつたが、家永三郎博士をはじめとして、今日の多くの学者は、むしろ『華嚴経』の教理にもとづいてその世界を具現せるものとする見解に傾いているように見うけられる。しかし、右に見たようにこの詩の第一・二句から第四・五句にかけては、『華嚴経』と『梵網経』の両者の教理にかなう点を見出すことができ、いずれか一経のみに限つてこれを考えようとするのは、やや性急のように思われる。大屋徳城博士が、

…上代人の意識は必ずしも整然たる系列を必要とせぬ。彼より一を採り、此より一を採り、点綴して事を成すを妨げぬので、

後世の如く、必ずしも脈絡の整然たるを要求しなかつた。されば、最勝王経と法華経と梵網経を貫く一条の系列なくとも深く関しなかつたので、これを整理して、其間に整然たる一理の貫くものなくば承服せず、満足しないのは、後世文化人の要求である。(中略) 東大寺の盧舎那仏は華嚴梵網一体の盧舎那か、或は別体の盧舎那か、而して、後者の場合に於いて、華嚴の盧舎那か、梵網の盧舎那かといふ問題は、近代の分析を念とし、系列の確立を期する思想からは、何とか判然たる解決を要求するが、寧楽朝人の思想では、左様に判然たる意識無く、或時は梵網の盧舎那として、深く考ふことなく、それにて満足して居たのではないか。畢竟するに、斯る解釈は或程度まで緩かにして置くことが却つて事の真相を得るのではあるまいか。⁽¹²⁾

と述べられたのは、この間の事情を洞察されたものとして傾聴すべきであろう。最近にも大仏蓮弁の線刻蓮華藏世界図について、

…大仏造立の思想的典拠は別としても、本線刻図に関する限りは、その背景を『華嚴経』『梵網経』二経のいずれか一面のみで捉えることは正鵠を見失うものであろう。⁽¹³⁾

という見解が示されていて、それらはいずれもこの詩句に対しても適當するよう思われる。

第七・八句「我皇称讚舎那徳 群臣舞踏法堂前」の「我皇」は、

時の天皇孝謙女帝だけをさすものではなく、大仏造願の発願者である太上天皇聖武と、太后光明らを含めると解すべきであろう。また、「群臣儼踏」は前引の大歌、久米儼、楯伏儼、擊鼓等々のこの日の舞楽演奏をさしているものであろう。

第九・十句「未見珍花開綵色 非常宝樹覆香煙」は、盧舎那大仏前の数々の莊嚴供花や妙なる燻香をただよわせている香煙のさまを叙しているが、『華嚴經』華藏世界品の、

其宝精奇非一種 放淨光明普嚴麗

香水分流無量色 散諸華宝及栴檀

衆蓮競發如衣布 珍草羅生悉芬馥

無量宝樹普莊嚴 開華發藥色熾然

の部分などを節略して七言句にまとめたものであろう。

第十一・十二句「以茲修善施百姓 忠心轉潔共承天」に至り、この日の供養を讚歎して、同時に官人としての忠心を拔瀝することを忘れてはいないのを見出す。

第十三・十四句「宗社不傾連万代 重雖繼日照千年」で全詩を結ぶが、「雖」を『続々類從』本は「難」にする。字体相似による誤りであろうが、ここは「雖」をとる。「連万代」「照千年」などの句を用いて、この大仏像の永遠の栄えを祈念しているのである。——以上のごとき意に解して、これを試訓すると、

一蓮花有リ 香水ノ海、

十世界ヲ分チテ 無辺ニ満ツ、

華毎ニ身ヲ顯シテ 妙理ヲ敷キ、

処ニ触レテ説ヲ示シ 芳縁ヲ啓キタマフ、

三明ノ菩薩 智恵ノ眼、

能ク衆生ノ業障纏ヲ滅ス、

我ガ皇 舎那ノ徳ヲ称讚シタマヒ、

群臣 法堂ノ前ニ儼踏ス、

未ダ見ザル珍花 綵色ヲ開キ、

常ニハ非ザル宝樹 香煙ニ覆ハル、

茲ヲ以チテ 修善百姓ニ施シ、

忠心 転タ潔クシテ 共ニ天ヲ承ク、

宗社 傾カズシテ 万代ニ連ナリ

重ネテ日ヲ繼グト雖ドモ 千年ニ照ル、

なお、この詩には作者名が示されていなくて不明であるが、仏典に明るい人物の作であるらしく、あるいは東大寺関係の僧徒の手によるものかも知れない。また、この詩はこれに続く(2)、(3)の詩に対しては、序詩的役割を果すもののごとくで、「供養舎那仏」歌辞「群にあっていわば総論的に当日の情景を叙し、舎那仏の永遠の栄えを願っているもの」と考えることができる。

三

右の詩に続けて白鳥香珮なる人物の詩序をともなった詩(2)がある。
はじめにその序と詩の全文を示すと次のごとくである。

五言并序 白鳥香珮

維天平勝宝四年歲次壬辰四月九日。國家於ニ金光明四天王護
國之寺。敬造ニ金銅盧舍那佛像。磨瑩粗畢。

車駕親臨。設ニ如法會。令レ講ニ花嚴經。金顏月滿。開ニ種好之
真容。句偈珠連。演ニ色空之奧義。爾其摩尼殿際。花樹百重。香
水海中。芳蓮千葉。文物普レ天。仰ニ梵帝之威肅。道俗咸集ニ率
土。沐ニ仁皇之惠化。

是日也。儼陳ニ文武。樂奏ニ華夷。山媛連袖之歌。共嘆ニ正覺。
而薦レ福植ニ拔劍之曲。自ニ劫耶媛ニ而致レ祥。又有ニ大安藥師寺等
四大寺各異伎。以助ニ莊嚴。雷鼓振而響レ天。象樓起而滿レ地。
飛宮行殿。誰踏ニ竜鱗。華縵繡幡。參差鳳翼。異形譎詭之戲。
眩レ目驚レ心。同類喧嘩之音。迷レ睛聒レ耳。東上以來。變曲新声。
処レ成レ群者。不レ可ニ勝載ニ矣。信是天下之壯觀。開闢以來未ニ之
有ニ也。

其時香風触レ地、疑ニ奈苑之在レ斯。花雨飛レ空。覺ニ禪林之不
遠。

微官香珮。幸屬ニ明時ニ預ニ妙法。不レ任ニ欣慶之至。將レ述ニ短
懷ニ云爾。

(2) 惠力包千界 香台聳一蓮

綵花奇絶俗 秘樂示妙通天

地似宛竜宮會 人疑麻華鹿苑筵

方知聖皇壽 劫石以為年4)

この詩及び序の作者、白鳥香珮については、当代の他の文献にも
全く徴すべきものなく、その閱歷など知ることができない。ただ、
例えば『統紀』天平宝字元年(七五七)五月丁卯(廿一日)の条に、
白鳥村主頭麻呂が正六位上より外從五位下に昇叙されたことが見え、
また同じく神護景雲三年(七六九)六月戊戌(二日)の条に、

右京人正八位下白鳥村主馬人、白鳥掠人広等廿三人賜ニ姓白原
連、

とあり、白鳥香珮もこれらの一族に属したのかと思われる。もし
この一族であるなら、更に後代の記録であるが、『統後紀』承和二
年(八三五)十月庚子(廿九日)の条に、

勅旨曰、左京人從六位下民首氏主、賜ニ姓長岑宿禰ニ焉。氏主
等与ニ白鳥村主ニ同祖。出レ自ニ魯公伯禽ニ云。

とあり、もと渡来帰化系の一族であったかと思われる。いずれにし
ても、白鳥香珮なる人物は、中下級官人の一員として、開眼会当日

その盛儀を目のあたりにすることができると位置に身をおいていたのである。

詩序は、はじめに天平勝宝四年（七五二）四月九日、盧舎那大仏造願の功がほぼ成り、天皇、太上天皇、太后ら臨席の下に如法会を設け、『華嚴經』を講ぜしめたことを叙し、次いで当日の華麗を極めた情景を細叙している。盧舎那大仏の容姿について、「金顔月満。開三種好之真容。」と述べているが、これは「大仏殿碑文」によると、

以天平十九年^{歲次丁亥}九月廿九日。始奉鑄鎔。以勝宝元年^{歲次己丑}十月廿四日。奉鑄已了。三箇年八ヶ度奉鑄御躰。以天平勝宝四年^{歲次壬辰}三月十四日。始奉塗金。未畢之間。以同年四月九日。儲於大会奉開眼也。⁽¹⁵⁾

とあって、大仏全身の塗金はまだ完了していないのにもかかわらず、開眼供養を急いで行ったのであった。さきに北山茂夫氏の述べておられるところを示したが、たしかに同氏のいわれるように、聖武太上天皇の健康のすぐれないことも、開眼会を急がせた理由の一つであったと思われる。また別に杉山二郎氏もほぼ同一の見解の下に、更に鑑真大和上来日の問題をもこれにからませて、次のように述べておられる。

天平勝宝三年四月二十三日、菩提法師が僧正に、良弁法師が少僧都に、道璿法師、隆尊法師がそれぞれ律師に任ぜられた。

大仏開眼会の漢詩

この僧綱補任記事は、すこぶる重要なことを語っている。というのは、ほぼこのころに盧舎那大仏の開眼供養がおこなえるところまでできていたようにおもわれるからである。すなわち、大仏殿の完成であった。けれど、奈良朝廷は多額の費用をつかって楊州の大徳鑑真を開眼導師として迎えようとしていた形跡がある。鑑真和上は、いろいろな点で不幸だった。ニホン渡来を企画し実行し、五度も失敗している。弟子の思託による『唐大和上東征伝』は、渡来ごとにおびただし出費のあったことを暗示している。だれがこの費用をまかなったのだろう。中国の篤志家か、いや、そうではあるまい。その供給者は奈良朝廷だったはずである。学問、経典だけでなく、多くの工人、技術者、医薬材料はもちろん、彫像をもたらししている。この渡来の態度は、天平期の「お雇い教師、お雇い外人」のそれである。けれど聖武太上天皇の健康はすぐれなかった。十月二十三日の『統紀』は、枕席おだやかでない（病気があまり良くない）といっている。十一月七日吉備真備は入唐副使となり、翌天平勝宝三年三月唐に向けて出発した。もう鑑真和上をこれ以上待つことはできない。

天平勝宝四年（七五二）四月九日、仏誕の嘉日をすごした翌日、開眼供養がおこなわれた。（中略）

聖武帝は自ら、大仏の廣大無辺の眼を開こうとなされたが、すでに造立までに精力のすべてを使い果してしまわれたのか、「疲弱起居が便にならないので、朕に代って、筆（開眼のための大筆で、現在正倉院宝物のなかにのこっている）をとって開眼するのは菩提僧正ただ一人だけである」と仰せられたという。わたくしは、聖武帝のこの言葉のなかに無限のなごりおしきを感じる。鑑真和上こそ、開眼筆をとるべき人だったのに、という気持ちをもたれていたと推定している。⁽⁶⁾

大仏開眼供養会と鑑真大和上渡日問題とを関係づけて考えようといわれるのであるが、いかなるものであろうか。

『東大寺要録』卷一、(本願章一)の天平五年癸酉の条によると次のごとくである。

五年癸酉。(中略)又有元興寺沙門隆尊律師者。志存鵝珠。終求草繫。於我國中。雖有律本。問伝戒人。幸筮玄門。嘆無戒足。即請舍人王子。処曰。日本戒律未具。仮王威力。発遣僧栄叡。随使入唐。請伝戒師。還我聖朝。伝受戒品。舍人親王即為隆尊奏。勅召件栄叡入唐。於是興福寺栄叡。与普照俱奉勅。四月三日。随遣唐大使多治比真人広成。到唐国。留学問。方知本国無伝戒人。請大福先寺沙門道璿。附副使大中臣朝臣名代之舶。先向日本。擬伝戒之法師。(下略)

これによると天平五年(七三三)元興寺の隆尊によってわが国に正式の戒律を布く要が説かれ、舍人親王と共に戒師招請のことが立案されたのであった。そして親王の奏によって、興福寺僧栄叡と普照が多治比広成を大使とする遣唐船に乗って、戒師招請のために渡唐したのであった。勿論、この段階では戒師として招請すべき唐僧の具体的名簿などはなく、栄叡、普照らは入唐後直ちに東都大福先寺の道璿律師に渡海を要請して副使中臣名代の船に乗せて帰国させたのであった(『東征伝』)。その後、栄叡、普照らは自己の研学に十年ばかりを費し、唐天宝元年—わが天平十四年—(七四二)に至って揚州大明寺に鑑真を訪れて、戒律伝授のために渡海せんことを求めている。『唐大和上東征伝』によれば、この時点から鑑真一行の渡日のための苦心が始ったのであって、それは十二年後の天平勝宝六年(七五四)に至ってやっと鑑真の渡海成功によって実現をみたのであった。一方で聖武天皇の大仏建立の発願は『統紀』天平勝宝元年(七四九)十二月の条に見える宣命に

去辰年、河内国大県郡乃智識寺爾坐盧舎那仏遠礼奉天則朕毛欲奉造止思登毛得不為之間爾……

とあり、「辰年」即ち天平十二年(七四〇)のことであった。そして更に『統紀』天平十五年十月十五日のいわゆる造仏詔勅には、

…粵以天平十五年歲次癸未十月十五日、発菩薩大願奉造……

盧舎那仏金銅像一軀……

とあり、この年十月十九日に紫香樂宮に大仏造立の工を起したのであった。——この頃、鑑真は榮叡、普照の請を受諾して、この年の四月に第一回の渡海を企図したが、弟子僧如海の誣告によって失敗し、更にその十二月に第二回目の渡海を決行したが暴風雨のために難破して、明州鄞県の阿育王寺に收容されている。おそらく同行した榮叡、普照らをはじめとして、鑑真自身もわが国において盧舎那大仏建立の業が開始されたことなど、夢にも知らなかった筈である。

天平十七年（七四五）五月、平城に復都したことによって紫香樂宮甲賀寺における大仏造建の事業はその骨柱を立てただけで中止され、あらためて八月になってから平城京東山の山金里ではじめられることになった。そして、その完成は上記のように天平勝宝四年（七五二）四月であった。この間、鑑真らは第三次～第五次にわたる渡海行がいずれも失敗し、榮叡も死去し鑑真も失明していた。聖武天皇が退位して女帝孝謙天皇の天平勝宝二年（七五〇）九月、遣唐使が任命されたが、その出発は天平勝宝四年（七五二）閏三月になつてからであった。その翌月四月九日に開眼供養会を行っているのであるから、時間的にこの時の遣唐使一行が、鑑真らをとまなつて帰朝するのを予定していたとは、とうてい考えることができない。またこの時の遣唐使一行も鑑真をとまなつて帰ることなど、はじめ

から計画の中にはなかつたのである。

更に今一条をつけ加えると、思託撰『大和尚伝』逸文に、鑑真ら一行がわが国に来着して入京した折のことを叙した箇所、次のごとき記述がある。

略歇息少時入京。勅使遣安宿王正四品於南閭門慰勞衆僧。勅令請住於東大寺安置。有京城僧徒及官僚文者等。於南閭門相迎同送引和東大寺。良弁僧都引至大仏前礼拜。良弁云。此是大帝太上引天下人共結良縁。鑄此金銅像坐高笏尺五十尺。

又問唐中頗有如此大像。遣延慶訳語云無。更礼拜供養讚歎行道竟。

この記述は、鑑真に同行渡来した弟子僧思託によるもので、一行の入京当時のことを、かなり正確に記録しているものと思われるが、見られるごとく一行を東大寺に案内した良弁は、開眼供養を終えてまだ二年に満たない大仏像をさして、さも得意げに「唐中頗有如此大像」と問うているのである。この語調からは、やはり鑑真を開眼師として迎えようという予定があつたものとは考えられないであろう。訳語を通しての鑑真の回答は「無」であつたというが、失明していた鑑真は、本国における巨大華麗な仏像の数々を思い浮かべて、良弁の他愛ない質問に苦笑していたのではあるまいか。

杉山二郎氏の推論は、一つの思いつきとしては興があるが、上記

の如く見來るとき、それを支えるに足る文献的証拠を欠き、とうてい従うことができないものである。

かくして、盧舎那大仏は、その全身の塗金も完了していないのに開眼供養を行ったのであり、その理由の一つは、聖武太上天皇の健康を考慮してのことであつたが、更にいま一つ考えられることは、開眼供養会をはじめ四月八日仏誕の日を期して行おうとしていた形跡があるということである。『東大寺要録』卷二、(供養章第三)に収める天平勝宝四年三月廿一日付の開眼師、講師、咒願師、都講などの招請勅書にはいずれも「以_ニ四月八日_一。設_ニ齊東大寺_一。」の語句が見え、当初四月八日を予定していたことが明らかである。おそらく仏誕の佳日を目ざしてすべての工事、準備が急がれていて、三月十日の塗金開始時には、全身塗金は四月八日までには完了するものと計画されていたものであろう。四月四日に聖武太上天皇と光明太后がそろって東大寺に行幸している(『東大寺要録』)のは、塗金その他の工事の進捗状況を視察し、あわせて関係者一同を督励するためであつたと思われる。ところが、折角四月八日を目ざして準備を進めていたにもかかわらず、実際にはそれは四月九日に行われていく。不慮の工事の遅延、あるいは天候の様子などによって一日延期せざるを得なかつたものと解すべきであらう。

詩序にかえつてみよう。「金顔月滿」の語句は、このような事情

を考慮するとき、全身塗金は未完であつたが、その顔面の塗金だけはともかく完了して、満月の如く金色に輝いていたことを物語っているのである。

「爾其摩尼殿際。花樹百重。香水海中。芳蓮千葉。文物普_レ天」は、大仏殿中あるいは大仏像周辺の莊嚴のさまを叙したものであるが、これらの句も詩(1)の場合と同じく、『華嚴經』に類似句が散見され、例えば同経毘盧遮那品には、

彼勝音世界中。有香水海。名清淨光明。其海中。有大華。須弥山出現。名華焰普莊嚴幢。十宝欄楯。周匝囿遶。於其山上。有一大林。名摩尼華枝輪。無量華樓閣。無量宝台觀。周廻布列。無量妙香幢。無量宝山幢。迴極莊嚴。(下略)

のごときがあつて、これらにもとづいて節略したものと考えられる。「是日也」以下詩序の第二段となるが、この書き出しは周知のように、王羲之『蘭亭序』に、

：雖_レ無_ニ糸竹管絃之盛_一、一觴一詠、亦足_ニ以暢_ニ叙幽情_一。是日也。天朗氣清。：

とある文章構造、即ちはじめに総論を叙し、「是日也」で一転して当日の具体的情景——各論に転ずる方法と一致している。このように総論乃至序論的部分と、各論乃至本論的部分とが、「是日也」のごとき句で連結されている詩序は、わが上代作品中にも他に次のご

ときがあり、それらと軌を一にするものといえるであろう。

：枯榮雙遣。何必竹林之間。此日也。溽暑方間。長阜向晚。

：（『懷風藻』、下毛野虫麻呂「秋日於長王宅宴新羅客」詩序）。

：為弟為兄。包心中之四海。尽善尽美。对曲裏之長流。

是日也。人乘芳夜。時屬暮春。：（『懷風藻』、藤原宇合「暮

春曲宴南池」詩序）。

いずれにしても六朝初唐における詩序から学んだ上代における

わが詩序の一般的構成をもって第二段を展開し、当日の具体的情景

を述べようとしているのである。以下につづく「儻陳文武、樂奏

華夷」は、さきに示したように内外種々の舞樂が演奏されたこと

をさすものであろう。なお、「大仏殿碑文」にはこれを

：同日奉施入大小灌頂廿六流。吳樂。胡樂。中樂。散樂、

高麗樂。珍宝等。：

と叙している両者の記述がほぼ一致している。

「山媛連袖之歌」以下は本文の異同も多く、ために十分に意をと

ることが困難であるが、「山媛連袖之歌」「抜劍之曲」などは具体的

な楽曲名かあるいは楽曲内容の具体的描写であろうと思われる。は

るかに後世のものではあるが、狛近真の『教訓抄』卷一に「振梓様」

についての記述があり、そこには「天長地久：」「一天雲殊静：」

などの鎮詞が記録されそれにつづけて、次のごとき記述が見えてい

る。

三部 新樂 高麗 古樂各一度 同音一度花蔽会等如レ此

四部 左新樂 次林邑 各一度 次同音一度 平立為上中振之 東大寺惣供養如レ之

これによると、「花蔽会」「東大寺惣供養」などの折には、古くか

ら右にあげたような舞樂が演奏供養されたものごとくで、その濫

觴はまさに天平勝宝四年（七五二）四月九日の大仏開眼会にあった

ものか、と考えられる。

「又有大安薬師寺等四大寺各異伎。以助莊嚴。」は、いわゆる奈

良四大寺から、それぞれ付属の舞樂団を派遣して演奏供養せしめ、

大仏開眼会を莊嚴したことをいうのであり、おそらくこのような折

にでも、樂曲をともなつて献歌されたと思われる元興寺の献歌が、

『東大寺要録』卷一には記録されている（これらの献歌については

また別の機会に論ずることにする）。

このようにして、耳に入る奏樂の音、目に映ずる華縵繡幢のはた

めき、燻香の妙なる香り、また異形の紛装で乱舞する舞人たち（「譎

詭」、『文選』洞簫賦李善注、「譎詭譎猶奇怪也」）のさまは、ま

ことに参列者たちの目をうばい、耳をおどろかせたにちがいない。

「信是天下之莊觀、開闢以来未之有也」とは、決して誇張された

表現ではなかつたのである。

最終段に至り、作者は自身を「微官香珮」と称して、今日の盛儀

に参列することを得たよろこびを述べ、「短懷」をものした所以として序を結ぶ。この結びもまた、六朝初唐の詩序に学んだわが上代の詩序にその類例を多く見出すことができる。ここにいう「短懷」は『萬葉集』卷十七に見える大伴池主が大伴家持に与えた天平十九年(七四七)三月五日付の書状にも、

昨日述^レ短懷、今日汗^ニ耳目、：

と見えていて、いずれも短い所懷の意に解するよりも、足らざる所懷の意に解して、自身の詩に対する辞謙の称にとるべきであろう。

以上のごとく、この詩序もわが上代詩序の一般的傾向からそれるものではなく、六朝初唐詩序の影響下になれるものとしてよく、駢文体がよく守られている。ただ、特徴的なことは主題の故からであるが、仏教語の頻用が目立ち、特に『華嚴經』の強い影響を見のがすことはできない。

なお、『東大寺要録』巻頭におかれている嘉承元年(一一〇六)孟秋の日付の『要録』撰者の序文には、この詩序および詩(1)から得た語句によって構成されている箇所があるので、その一部分を左に示しておく。

…其会蔽^レ不可^ニ勝載。聖皇称^ニ讚舍那之德。群臣舞^ニ踏法堂之前。非常宝樹薰^ニ梅檀之香。未^レ見珍花発^ニ摩尼之色。時乃道俗雲集仰^ニ梵釈之威肅。尊卑星羅沐^ニ仁皇之惠化。信是祇洎精舍之

盛集。摩竭鷲峯之儀式也。

大仏開眼の日を去ることおよそ四五〇年、『東大寺要録』撰者は、この詩序や詩(1)などを心に留めて、その序文をものしたのであった。(なお、右に掲げた以外にも序文に借用している語句を散見できるが、いまはすべて省く。)

かくて、この詩序につづけて五言律詩の詩(2)が置かれる。この詩は、詩序に述べたことを要約して詩の形式に整えたものであるが、その尾聯において、「方知聖皇寿 劫石以為年」と詠じて、聖皇―太上天皇聖武をさしていると考えられる―の寿命のいや永からんことを祈って結ばれている。この年五十四歳、「朕身疲弱、不便^ニ起居」と肉体的衰えを嘆じている聖武太上天皇の健康状態をも懸念してのものと解すべきであろう。押韻は先韻下平、試訓すると次のごとくである。

恵力 千界ヲ包ミ、
香台 一蓮ニ聳ユ、
綵花 奇シクシテ俗ヲ絶チ、
秘菓 妙ニシテ天ニ通ズ、
地ハ似ツ 竜宮ノ会、
人ハ疑ヒツ 鹿苑ノ薙カト、
方^ヲシニ知リヌ 聖皇ノ寿、

劫石 以テ年ト為スト。

四

詩(3)は笠宮曆の七言律詩である。はじめに詩の本文を示すと、次のごとくである。

七言 笠宮曆

(3)聖皇法会開^用今日 無上妙容奇功終

淡壤競争奉珍綺 拳天和応調雨風

丹青可愛忽碎首 謬湯土宜^{土尊}導奇駛

際^{樂拉}広示壯觀非肯 計諒知寰内軌文

この詩の作者、笠宮曆についても、他の文献には見えず、その経歴などについては一切不明である。あるいは『萬葉集』作者の笠朝臣金村とか、笠女郎、笠沙弥などと同族の関係にあるのかも知れないが、これも不明である。

詩は内容的には前詩と大同するもので、今日の大仏開眼の盛儀を讚歎しているが、本文に不純箇所が多く、完全に意味をとらえることは困難である。また、文法的にも破格の箇所が目立ち、全体的に和習の強い作となっている。極言すれば、漢字をその意味に従って七字ずつ八句に連ねただけとも言える態のもので、佳品とは称し難い。おそらく漢詩の制作にはあまり慣れていないものの手に出る作

であろう。したがって、押韻も不揃い、また平仄もほとんど意に介した風でなく、ただ形式的に七言八句に仕立てたものではないかの感さえ抱かされる。しかもその意味は甚だとり難く、大よその意味するところを汲みとることしかできない。今後の研究に俟つとして、一応今の段階での訓読を試みると、次のごとくである。

聖皇ノ法会 開カルル今日、

無上ノ妙容 奇功終ル、

淡壤 競争ヒテ珍綺ヲ奉リ、

拳天 和^ナ応^ゴミテ雨風ヲ調^トフ、

丹青 愛^カシム可シ 忽チニ碎首、

謬湯ノ土 宜シク奇駛ヲ導クベシ、

際^カ広 壯觀ヲ示シテ肯^カニシ、

計リテ諒知ス 寰内ノ軌文。

五

盧舎那大仏開眼供養にかかわる文学的営為として今日に残るものは甚だ乏しく、そのうち右に見てきたように、漢詩文の場合は、特に未熟稚拙なものが多かった。その多くは『華嚴經』『梵網經』などからの借用辞句をつらね、形式的には詩の体を保ってはいるものの、内容的には決して高い文学的達成をとげている作品とはいえない

いものである。作者たちはいずれも詩人としての修練も乏しく、したがってまた、詩的感性もあまり豊かな持主ではなかったものと思われる。しかしながら、これらの作品は、わが上代文学の世界に、新たに仏教文学、釈教詩歌への方向をまさぐらせるきっかけを作り、新しい主題と素材を導入した意義は大いに認めねばなるまい。

この頃、ようやく文人としてその名声を謳われるようになっていた淡海三船、石上宅嗣らに、もし開眼会の作品があったら、おそらく(1)~(3)の詩に比して、もっと精彩に富むものがあつたのではあるまいか。すでに記したように、これら当代一流の文人や歌人たちにとって、完全な宗教行事であり、絢爛たるページェントであつたこの日のありようは、全く詩心を燃えたたすものではあり得なかつたし、また、このような公的行事において歌はすでに求められなくなつていたので、見るべき歌作もなく、むしろ詩を賦さぬこと、歌わぬことで、聖武朝晩年の巨大な事業に対する批判の姿勢を示したと解することはできないであろうか。

注

- (1) 北山茂天『大伴家持』(昭和四六年九月、平凡社)。
- (2) 板橋倫行「仏教と文学」(『図説日本文化史大系 第三卷 奈良時代』所収、昭和三十一年十一月、小学館)。
- (3) 拙稿「文人之首(その二)——石上宅嗣の生涯と文学——」

(「日本文学」二二の一、昭和四七年一月)。

(4) 筒井英俊編『東大寺要録』(昭和十九年一月、全国書房)の本
文により、論述に必要な人名や分注の類はすべて省略して
示した。以下本稿に示す『東大寺要録』本文はすべてこの本に
より、必要に応じて『続々類従』本などを参照する。

(5) 北山茂天「大仏開眼記」(『萬葉の世紀』所収、昭和二八年五
月、東大出版会)

(6) (4)に示したように筒井校訂本を底本にとり、『続々類従』本
をもつて校異を示した。両者とも醍醐寺本によつたと称してい
るが見られるごとく本文に異同がある。

(7) 家永三郎「東大寺大仏の仏身をめぐる諸問題」(『上代仏教思
想史研究』所収、昭和十七年四月、畝傍書房)。

(8) なおこの問題については、井上薫『奈良朝仏教史の研究』(昭
和四一年七月、吉川弘文館)、奈良六大寺大観、第十卷、東大
寺二(昭和四三年八月、岩波書店)など参照。

(9) 『^{大正}新修大蔵経』第十卷 華嚴部下所収のいわゆる八十卷新訳本
による。

(10) 『^{新訂}増補国史大系』第三一巻所収の本文による。

(11) 大野法道校註『梵網経』(富山房百科文庫64、昭和十五年一
二月)の本文による。

(12) 大屋徳城『寧楽仏教史論』（昭和十二年十一月、東方文献刊行会）。

(13) 『奈良六大寺大観、第十卷、東大寺二』の解説五五頁。

(14) (6)と同じ。但し詩序の方は私に校訂した本文により、校異は省いた。

(15) 『東大寺要録』卷二、（縁起章第二）に収める本文による。

(16) 杉山二郎『大仏建立』（昭和四三年十一月、学生社）。

(17) 拙稿「鑑真渡海前後―開元皇帝御製詩『送日本使五言』の周辺―」（『神戸外大論叢』25の3）。

(18) 『東大寺要録』卷四、（諸院章第四）に収められている本文による。

(19) 日本古典文学大系『懐風藻』（小島憲之校注、昭和三九年六月、岩波書店）の本文による。

(20) 日本古典全集『教訓抄』上（昭和三年六月、日本古典全集刊行会）の本文による。

本稿をまとめるにあたり、小島憲之・井手至両先生から種々と御教示をいただきました。記して深謝申し上げます。

黄葉片々

かげろふの石

奥村恒哉

京都府宇治市の、京阪電車宇治駅から三室戸へ到る旧道の途中に、古来、「かげろふ（蜻蛉）の石」と言いならわしている石仏がある。高さ二メートルの花崗岩に三尊を線刻したもので、平安時代末期の製作、石像美術の逸品である。又、その左傍に「蜻蛉之古跡、源氏物語宇治十帖之内」と刻した石柱がある。この文字は近世後期のものである。

「かげろふの石」は古くから著名で、地誌にも屢々記載され、「都名所図会」には挿画もある。近頃のものでは朝日写真ブック「宇治」に写真があり、説明を添えている。しかし、「蜻蛉之石かげろふのいし」と名づけられた所以については、なお、はかばかしい説明がない。

地誌の理解から点検してみよう。「山州名跡志」、卷十五、宇治郡の条

○伝云、此石靈石也と。按に世人、蜻蛉石セキと唱るは非なる歟。

古より蜻蛉石ノイシといへり。田村謡曲に、栗津の森やかげろふの、石山寺と云ふは、此名を寄たる也。

とする。この説明では「かげろふの石いし」の名が古くからあって、それによって謡曲の詞章が構成された、と考えているのである。「蜻蛉石」は古いものである。しかし、「田村」と簡単に結びつけるのは如何であろうか。「蜻蛉石」なる名称を記したものは、近世初より遡り得ない。製作年代より名称の方が、ただ今は問題である。「田村」と結びつけるのはおそらく無謀である。しかし、「田村」の詞章については考えてみなければならぬ。

やがて名にしおふ、関の戸ささで逢坂の、山を越ゆれば浦波の、栗津の森やかげろふの、石山寺を伏し拝み、これも清水の一仏と、

という部分である。

謡曲の諸註では「かげろふの」が「石いし」にかかる枕詞として解するのが一般である。文章の理解としては誤りがないことと思う。しかし、今の場合、問題になるのは、何故に「かげろふの」が「いし」の枕詞になり得るのか、ということである。

福井久蔵博士「枕詞の研究と釈義」をみると、

かぎろひの又かぎろひの春万六心燃えつつ万九

の条、内容は「かげろふの」も一緒に論じられているが、「いし」

にかかると例証は示されていない。この条に挙げられた例は、萬葉集では「蜻火之」「炎之」「香切火之」と表記されたもので、いずれも「いし」にかかる例ではない。

「いし」にかかるべきものは、後世「たまかぎる」と訓読されるようになった、或は元来「たまかぎる」であった「玉蜻」であって、「研究と釈義」では「たまかぎる」を別項目に立てている。

「玉蜻」は言うまでもなく、旧訓「かげろふの」であり「たまかぎる」なる訓読は伴信友の「比古婆衣」、又は鹿持雅澄の「玉蜻考」をもってはじまり、確認されたものである。それ故、「たまかぎる」を枕詞として通用させた例は、後世には無い（信友、雅澄の説が確認されて後、その影響下での作歌は別として）。したがって、「研究と釈義」の「たまかぎる」の項は専ら萬葉集の内部での論である。

かつて、「かげろふの」と訓まれた「玉蜻」が「磐垣洩」(二、二〇七)、^{いはがきふち}「石垣洩」(十一、二七〇〇)に接する例がある。「磐」は「いは」とのみ訓まれる字であるが、「石」は、文字としては「いし」「いし」のどちらにも訓み得る（井手至氏「石橋と岩橋」萬葉

四十八号。又、拙論『『いしはしる』と『いははしる』』皇学館論叢七卷三号)。又、次のような例もある。醍醐の南に「石田」なる聚落があり、その田中明神は萬葉集の「山科乃 石田社尔」(九、一七三一)、「山科之 石田之森之 須馬神尔」(十三、三三三六)と詠まれ、古来「いはた」と訓んでいる。これについて「山城名跡巡行志」第六、宇治郡二では、社は「石田森」としながら「石田名村」とし、「石田古歌ニハイハタト呼
今在名イシタト云フ」と説明している。

そこで、「かげろふの」が「いし」に続くべき根拠としては
玉蜻 石垣洩 隱庭(十一、二七〇〇)
をあげるべきであろう。

即ち、「かげろふの」が「いし」に接するのは、旧訓による枕詞としてである。謡曲の「かげろふの 石山寺」も旧訓によって文章をなしたのである。三室戸の「蜻蛉石」も萬葉集の旧訓が定着した呼称と考えられる。

書評

伊藤 博著『萬葉集の構造と成立』(上・下)

渡 瀬 昌 忠

一

萬葉の一首一首を独立した和歌として読むことのほかに、従来雑然たる未整理の書と目されてきた萬葉集そのものを一つの表現体として読み、その構造体の形成過程を読むということも、また楽しい文学享受であることを、本書はわれわれに説き明かしてくれる。それは、いわば「編者」の文学であり、貴族・知識人の営為であるが、しかし、萬葉の個の和歌も衆庶の歌々も、それぞれに文学の対象たりうるとすれば、それらを萬葉集という構造体の中に位置づけた編者の営みもまた独自に文学の対象でありうるはずなのである。

しかも、この構造体は、層々、数次の形成過程をもつ。本書の説くところによれば、それは、△持統萬葉(一卷本)―元明萬葉(二卷本)―元正萬葉(十五卷本)―延暦萬葉(二十卷本)―平城萬葉

(認証本)▽という八十年から百年にわたる過程であった。もし萬葉集そのものの中に、それぞれの過程における各「萬葉」を見いだしうるとすれば、その各本がまた独立した作品であり、そこにそれぞれの編者の文学を見ることが可能である。本書の説くところは、その編者の文学の継承発展の具体相であり、各段階の「萬葉」の形と心とを、時代社会の状況や気運とのかかわりのなかで明らかにすることであった。それはまさに音高く流れる「一つの文学史」(下四四八頁)である。

本書は次の十二章によって構成されている。

- 第一章 基礎的考察
- 第二章 舒明朝以前の萬葉歌の性格
- 第三章 記紀と萬葉集
- 第四章 古今歌卷の論
- 第五章 今歌卷の論
- 第六章 萬葉集における歌謡的歌卷(以上上巻)
- 第七章 萬葉集における付庸的歌卷(以下下巻)
- 第八章 萬葉集の体系
- 第九章 女帝と歌集
- 第十章 家持歌日記と萬葉集
- 第十一章 二十卷本萬葉の形成

第十二章 萬葉形成史の意義

第一章では、完本として現存する仙覚校合の二十卷四五一六首本の萬葉集がほぼ奈良朝古撰本の形を伝えるものであり、これが萬葉集の構造と成立の論のための第一等の資料であることが、異本の成立過程の検討とともに解明される。また、第八章第三節「目録の論」も、われわれに文献上の再認識をうながす。卷十六～二十の目録が書写時代、次点期初期に某中古人の作製したものであるのに対して、卷一～十五の目録が萬葉編纂に近接する時期の、本文編者とは異なる同一人（層）の作製であることが、委曲を尽して論じられる。

著者はかつて伝統的な萬葉集十六卷本説を展開したことがあった。十四卷本説（安田喜代門氏）や十七卷本説（伊丹末雄氏）なども出されているが、本書において著者が新たに「十五卷本萬葉集」説を提唱したのは、本書の第二章から第七章にいたる、萬葉集の卷々の構造論的内部検証、ことに卷十六の根源的考察の結果であることは言うまでもないが、一つにはこの目録の文献的徴証が働いているのである。そして古代的な、検索の便に備えた卷一～卷十五の目録の存在は、題詞を高くさしあげて書く古本の形態（下七九頁）とともに、十五卷本萬葉集を「類聚倭歌集」として性格づける傍証ともなっている。文献に対する著者の確かな目が本書における論証の展開に重要な役割を果している一例である。

二

卷一と卷二との構造およびその成立についての本書の考えは、第二章・第九章に詳しい。特に第九章では、著者みずから卷一、二「両卷の再吟味はすなわち萬葉本質論でもある」（下二〇一頁）と言っているところである。それらによれば、現卷一のA部（一～五三）は、舒明天皇の春の国見歌（二）によって開始され、藤原宮の春の国見儀礼歌（五二、五三）によって結ばれる「白鳳的現代宮廷歌集」であり、その巻頭に、雄略天皇御製（前代の象徴的天子による、国見行事の一つとしての菜摘・歌垣の歌）を、白鳳的現代の規範の歌として飾った、藤原宮本＝持統萬葉である。

卷一の文武朝以後（B部）を追補部とし、藤原宮の歌以前（A部）を原形的なものとするのは、沢瀉説に代表される通説だが、本書は、その原形部を首尾照応した意図的な編纂物とし、これを藤原宮本＝持統萬葉と名付けたのである。そう言われて見直すと、首尾の照応は左右対称的でさえある。舒明国見（国ぼめ）に対する藤原宮国見（宮ぼめ）の内側は、舒明の内野遊獵に対する軽皇子（その父草壁も）の安騎野遊獵、さらにその内側は舒明の讚岐への行幸に対する持統の伊勢・吉野・紀伊・近江への行幸が連なり、かく遡りきれば、持統朝の第一首は、舒明朝の第一首と同じく、香具山の御製なので

ある。この見事な照応は卷一「A部には一歌集としての構造的な可能性がはりめぐらされて」(下二〇四頁)いるという著者の言を信ぜしめる。舒明朝と持統朝との間に介在する皇極・斉明・天智・天武四代の歌々も、すべてが遊獵・行幸もしくは羈旅の歌と、大和三山(一三)春花秋葉(一六)を詠ずる宮廷の詠物歌とから成る。

卷一雑歌のA部(特に舒明・持統朝)が「舒明皇統歌集」とも称すべき、白鳳宮廷の発展の姿勢を歌によって示そうとした歌群であったとする本書の主張は肯定できよう。なお、卷一のB部(五四～八三)は元明天皇の時代を現代とするが、元明女帝姉妹の唱和二首(七六・七七)を除いては、すべて行幸・羈旅の歌々のみで、最後に藤原宮から寧楽宮への遷都の歌を据えているのは、A部を継承したものと言える。さらにその後には奈良遷都後の「御井」と「娘子」との歌を置いたのが、A部末尾に対する連鎖反応であろうことも、本書の説くところである。現卷一が、A部の意図をB部が継ぐという形成過程をもったことは、かくして疑いがない。

しかし、卷一A部が、卷二原形部と別個に成立していた一本であったかには疑問がある。

研究史を踏まえつつ本書の説くところによれば、卷一A部と卷二相聞部と卷二挽歌部との、追補歌を除いた三原形歌群は、次の三点において共通する。

- (1)「——宮御宇天皇代」の標題で分類する。
- (2)「藤原宮御宇天皇代」を人麻呂圈歌で終る。
- (3)古事記時代の歌を巻頭に仰ぐ(卷二相聞巻頭歌は挽歌を含む卷二全体の巻頭歌を兼ねる)。

しかし卷一A部は卷二の両歌群に対して、次のような孤立性をも示す。

- (イ)卷一A部は題詞に歌数を示さず、卷二の両歌群は丹念に歌数をしるす。
- (ロ)卷一A部には舒明・皇極朝の歌があるが、卷二にはない。
- (ハ)卷一A部は巻末を持統朝一代で閉じているが、卷二挽歌原形部には文武朝・元明朝の歌がある。

(ニ)卷一A部は、総じて作歌年代が古い上に、それ自体完結する歌集を構成する。

こうした共通性と孤立性とを本書は次のように見る。(イ)～(ニ)の孤立性は卷一A歌群が最も早く成立したことを示し、(1)～(3)の共通性は、卷一A歌群を継承して一段階のちに卷二原形歌群が組みあわされたことを語る。したがって、卷二原形は、卷一B部とともに、奈良遷都の後、元明女帝生存中に、卷一A部藤原宮本||持統萬葉の編纂意図を追って編纂された元明萬葉であったと。

しかし、共通性としては、(2)に関連して、卷一・二に限り人麻呂

作歌などが反歌の前に「反歌」「短歌」の両様の題目を有していることがあげられよう（神田秀夫氏・稲岡耕二氏指摘）。そこに三原形歌群における同資料性が認められる。そして共通性の(1)(2)も、三原形歌群の同資料性によるものと見ることもできるだろう。（共通性の(3)は共に元明萬葉成立時に生じたものかもしれない。）

孤立性の(二)は上に見たとおりであるが、巻一A部と巻二原形部とが、いまだ雑歌・相聞・挽歌に分類されない前の原形として、巻一A部が、舒明国見歌から藤原宮歌にいたるまでの間に、もっと多くの歌々を擁していたかたちを考えることもできよう。特に人麻呂の日並皇子挽歌などは、白鳳宮廷歌集として不可欠の（軽皇子遊獵の歌より前にあるべき）ものではなからうか。孤立性の(ハ)の、巻二挽歌部の文武朝・元明朝の歌については、人麻呂作の明日香皇女挽歌（文武四年薨）は位置が乱れており、人麻呂の死をめぐる歌々とともに追補と見ることとできる。最近、巻二挽歌原形部を高市皇子挽歌までとする提言（橋本達雄氏・松田好夫氏）もなされている。孤立性の(ロ)の、巻二（相聞・挽歌）に舒明・皇極朝の歌が無い点については、著者自身が「萬葉ぶりの相聞歌が実質的に近江朝あたりから形成されはじめた」とも、天智天皇が白鳳現代における「最初の、恋愛・風流の主人公である」（上九〇頁）とも言い、「挽歌の発達は他の種の歌に比べて最も遅れている」（上九五頁）とも言っている

ことが、解決を与えてくれる。

最も顕著で、本書を含め先学をまどわしてきた孤立性は(イ)であるが、これについては次のように考えることはできないか。

巻一・二の原形においては、題詞に歌数を示さなかった。そこから相聞歌と挽歌とを抜き出して（恋歌でも公的な場のものは残された）「相聞」「挽歌」の部を立てた時に、題詞ごとに歌数が記された。それは巻二巻頭歌の「磐姫皇后思_三天皇御作歌四首」（これは連作作者が付したもので、もしこの「四首」の文字が無ければ、その第一首に「右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉」と左注されると、皇后の「御作歌」は第一首のみとも取られかねない）の影響が大きかったろう。巻頭歌にならって巻二の歌々はすべて歌数を題詞にもつことになったと思われる。いったい、歌数のしるされていない原歌群から歌を抜き出して新しい歌群を作るとき、新歌群には歌数をしるすが、旧歌群はそのままにしておく、といったことは起りやすい。現にその例が巻九にある。

第四章の第二節、四「巻九の構造」に本書は説く。

巻九は、資料的段階ともいえるような根源的段階において、人麻呂集常体歌集と虫麻呂集歌とによって成り、部立を持たない時期があつたと推定される。その合体の歌集から「相聞」と「挽歌」とを抽出して、後に三大部立を組み立てたのでないか。

(上二四七頁)

と。卓見である。そして人麻呂歌集所出と虫麻呂歌集所出とを示す左注のうち、相聞部と挽歌部とはすべて「右〇首……」と歌数をしるすのに対して、雑歌においてのみは、すべて(一七〇九左、一七二五左、一七六〇左)「右」とのみで歌数をしるさず、その範囲が曖昧になっているのである。

本書の右の言い方に準ずれば、巻一・二の「根源的段階」も、部立をもたず、歌数をしるさず、「——宮御宇天皇代」の標題で分類され、人麻呂歌集で終わっていた。その根源萬葉から「相聞」と「挽歌」とを抽出し、他資料からの増補をも加えて、後に三大部立を組み立てたのが巻一・二(元明萬葉)ではなからうか。

私見を申すことが許されるなら、その根源萬葉は、漢籍名の『雜賦』『雜詩』(隋書經籍志)などにならない、それらに対抗して『雜歌』(いろいろの倭「歌」を集めた書物)と名づけられていたのではなからうか(その編者が人麻呂であることも十分にありうる)。そこから私的な恋の歌(相聞)と死にかかわる歌(挽歌)とを抜き出した残りの宮廷歌・行幸歌が新たな構造を与えられて、「相聞」「挽歌」に対する部立名として「雑歌」の名を引き継いだのではないか(「雑」の意味に変遷あり)。「雑歌」という一見不純な命名の部立が萬葉において先立つことの意味は、かくして解けるであろう。

そのような『雑歌』は、宮廷歌・行幸歌のみならず、恋歌をも悼亡歌をも含み、まさに「白鳳現代歌集」の名にふさわしい。それは、まさしく本書の説く皇子皇女たちを中心とする白鳳宮廷人の教養書・娯楽書でありえ、元明萬葉における「人間への郷愁の書」の原型でありえたであろう。それはまた、古事記に親しく接続し、日本書紀とは対立しつつ育った歌集としての原初萬葉(第三章)にも、ふさわしい。

そして本書の説く持統萬葉から元明萬葉へという構想も、右のような、『雑歌』から巻一・二(雑歌・相聞・挽歌)への発展の相においてこそ、より有効に生かされるのではなからうか。また巻一・二の成立過程をこのように解しうるなら、巻九が、巻一・二の構造精神をまっすぐ継承する「古今倭歌集」であったとする本書の主張(第二章の第三節)も、より本質的な貢献を得るであろう。

持統萬葉を巻一A部のみの一本とすることには、なお疑問があるにしても、持統萬葉から元明萬葉へという路線において、また「近世」の古歌を規範と仰ぐ古今倭歌集として、巻一・二両巻の成立をとらえる本書の視座に狂いはない。

持統萬葉の読者は軽皇子(文武)日高皇女(元正)を中心とする白鳳の宮廷人たちであったらう。元明萬葉は首皇子(聖武)を当面最大の読者として意識していたかと、本書は説く。そして、持統萬

葉が額田王メモ・人麻呂ノートを資料としたらしいのに対して、元明萬葉に参与したのは長田王・六人部王だったかもしれない。持統萬葉から元明萬葉への展開と構造とは、右の推定をありうるものと思わせる。

本書によれば、その巻一・二が古歌卷（白鳳）として仰がれて古今歌卷（白鳳と奈良）としての巻三・四が併せられ、さらに現代を誇示する今歌卷（奈良）である巻五・六が併せられて、六巻は作者記名の古今倭歌集の構造をなす。その論証の過程は、巻三・四から五・六へと、実に精密に展開される（第四章・第五章）。

わたしは、本書を読むために、萬葉集の原文のテキストを一冊新調して書き込みをしてみたが、巻三においては「原本卷三雜歌」「譬喩歌新設後の追補」「白鳳譬喩歌」「天平譬喩歌群」「原本卷四挽歌」「天平十七年以後追補」「諸兄他界後追補」、巻四においては「原本卷四相聞」「天平十七年以後追補」と、順次に一首残らず塗りつぶされてしまう。そうして、巻三・四が、いちどは巻一・二の拾遺歌卷として三大部立で編まれた後、新たな文芸意識をもった家持によって編み直され増補された古今歌卷であることが明らかにされる。

巻五においても、憶良歌卷から他巻へ切出されたもの、憶良歌卷本来の部分、旅人側資料から憶良歌卷へ切継がれたもの、二重写し

の部分、旅人側資料や他人の資料で校合されたもの、巻末への追補といった各部分が見事に截断され浮彫りにされて、巻五が天平五年以降に家持によって編まれた「筑紫関係新文芸歌卷」であることが明らかになる。巻六も同様にして、巻一の続篇としての現代宮廷歌卷（今雜歌集）たることが説かれる。そこには寸分の隙間もない。そして、この周到緻密な分析による「古今」構造の解明は全二十巻をおおい尽す。一冊のテキストは目録から巻末まで完全に塗りつぶされるのである。

三

人麻呂歌集と重要なかわりをもつ巻七～十二の六巻もまた古今倭歌集であった。巻七・十・十一・十二において、人麻呂歌集・古歌集の歌が「古」であり、これを規範として続く出所不明歌が「今」であって、両者によって古今歌卷が構成されているとする本書の見解に、疑いの余地はない（第四章第二節）。

ただし、巻七雜歌部については、「今+古」となるところがあつて（羈旅作）、著者は説明に窮しており、一一八七番歌の人麻呂歌集略体歌一首を「後加」（空間的の）とする拙論を批判しつつ、この一首が出典不明歌にも人麻呂歌集にもあつたものとする見方を提示しておられる（上・二二二～二二三頁）が、出典不明歌を略体表

記に改めて「歌集出」と注したとするのは、ずいぶん苦しい解釈だ
と思う。もつとも、続けて「羈旅作」全体を「古集」とする新見も
述べられていて(上二三四頁)、それだと右の小見へのいささか無
理な対案は必要なくなるのだが、それにしても、「羈旅作」以前の
出典不明歌に対しては、「今十古」となることに変りはない。

実は、卷七雑歌部全体が、天地人分類をもつ古集・古歌集を核に
して、人麻呂歌集の歌を冒頭の「詠天」(一首)に据えたり、以下
の諸所に「前入」したり「後加」したりしたものであること、別に
論じた(『古代文学13』拙稿)。著者は上卷二七三頁の「追記」でそ
のことに触れて下さっており、ここにも著者の不断の柔軟な姿勢が
示されている)。もし、この小見が是認されるなら、卷七全体が文
句なく古今歌卷であるのみならず、卷七雑歌全体がほとんど古歌に
よって構成されていることになるので、卷七・八・九・十・十一・
十二の古今歌卷(B)群の中で卷七が先頭に立つゆえんも明らかに
なるうと思うが、どうであろうか。

卷八は、人麻呂歌集非略体歌部(季節歌群)を規範とした大伴宿
禰家持歌集を核として形成された歌卷であったが、本書によれば、
「古今」構造はすでに宿禰家持歌集の段階から始り、卷八において
完成する。人麻呂歌集を規範とする古今倭歌集としての性格を、卷
八は完全に備えているのである。だとすれば、古集・古歌集を核と

した卷七と、大伴宿禰家持歌集を核とした卷八とが連れだつのもま
た、まさに「古今」構造ではなからうか。天地人分類(卷七)と四
時分類(卷八)とが直結しているべきものであることも、人麻呂歌
集や中国類書の分類体系の語るるところである。

卷九も、人麻呂歌集を「古」とし、虫麻呂歌集を「今」とする古
今構造を有することを、本書はきわめて雄弁に解明する。雑歌の歌
集歌の範囲について、「あえて極端を狙った」拡大解釈を仮定した
上で、その拡大部分の、人麻呂歌集や虫麻呂歌集とのある種の等質
性を説くなど、心にくいばかりである。

ただし、卷九相聞部の「与妻歌」「妻和歌」二首(一七八二・一七
八三)を、卷九人麻呂歌集の原本とは違う一異本から採録され追補
されたものとするのには疑問がある。相聞部の人麻呂歌集が皇子へ
の献歌三首(一七七三・一七七五)と右の二首との二箇所に出てい
るのを、同一資料からのものと見る道は残されているように思う。
題詞を尊重する卷九の、贈答や恋の当事者に関心をもたざるを得な
い相聞部においては、題詞における人名の有無は重要である。現に
卷二相聞部において題詞に人名を記さないものは一例もない。ここ
ろが卷一・二をまっすぐに受けた卷九において、本書のいう相聞a
部(一七六六・一七八一)は題詞記名部とも言いうるものであり、
b部は題詞無記名部とも称すべきものである。人麻呂歌集の「与妻

歌」「妻和歌」の題詞の無記名であったことが、これをb部へ追いやった理由ではなかったか。その人麻呂歌集を「古」歌と仰ぐb部（一七八二～一七九四）は、神龜天平の金村歌中出歌などを「今」歌として、すべて題詞に人名をもたないのである。福麻呂歌集が挽歌部で虫麻呂歌集の前に追補されているのは、「重いものを巻末に置きたいという構造精神がはたらいている」（上二四九頁）からだとすると、相聞部でも福麻呂歌集はa部の虫麻呂歌集の前に置かれてもよいはずなのに、それがb部の最後に置かれたのは、やはり福麻呂歌集が題詞に人名を記さぬゆえであろうと思うが、いかが。

卷九の相聞部と挽歌部との人麻呂歌集は、いずれも本来は雑歌部の、本書のいわゆるA部のそれと同居していたものと見るべきだと思ふ。いずれにしても、卷九の「古今」構造にvarietyはない。しかし、題詞記名（a）部と題詞無記名（b）部とのそれぞれに古今構造をもつ卷九相聞の姿こそ、本書のいう「古今歌卷」「作者名については中間的性格を示す部」（上四一五頁）に属する卷九の本質にかなったものではなからうか。

卷十一・十二の出典不明歌が、人麻呂歌集を「古」なる「作歌参考書」として仰ぎ、その影響を受けたものであるとする本書の主張は動くまい。しかも短歌を主とする「大和園（近畿）歌謡歌卷」としての卷十一・十二は、長歌による「宮廷歌謡歌卷」たる卷十三と、

短歌による「東国歌謡歌卷」たる卷十四とを導く。そして、卷十三・十四は、ともに人麻呂歌集を「古」とせず、古今構造を取らず、ひとしく「古代国郡図式順」配列を有する「類聚歌卷」であった。このことを明らかにしていく過程（第六章・第八章第一節）も、まことに鮮やかである。

卷十五は、前半の遣新羅使歌群と後半の宅守・娘子贈答歌群と共に係恋実深の同一主題をもつ長編の歌物語集であり、卷十六の一段階（三八五四番歌までの、無注記歌を除いた五一首）は格別に特殊異常（非日常的・非伝統的）な歌群を類聚した付録で、かくして「十五卷本萬葉集」が成る。

十五卷本萬葉の編纂意図は「古今の倭歌を集大成し和歌的世界を確立することによって歴史と社会の上に持つヤマトウタの意義を定着せしめ、もって古代国家や古代人間像の盛容の実態を誇り、その充足を企図する類聚和歌集を編む」ことにあった（下二三二頁）。「萬葉集」の名義も、万代思想に基づく「万代集」の意であり、十五卷本萬葉は、白鳳回帰の執念を元明から受け継いだ元正上皇の意を体して完結された「元正萬葉」であった、と本書は説く。

そして、十五卷本の編輯実務者の有力メンバーを大伴家持とし、その上に市原王がいたかとし、さらに坂上郎女や橘諸兄を宮廷（元正上皇）の発意を取り持った存在として想定する。諸状況に加えて

諸説の総合の上に立った慎重妥当な想定であるが、本書の十五巻本編集中と目する天平十八年正月の肆宴歌(17・三九二二〜二六)が諸兄に始まって家持に終り右の想定にとって意味ありげに見えるにもかかわらず、そして三原王ら六人の王たちも名を連ねるにもかかわらず、ここに市原王の名の見えないことに不安が残る。

四

末四巻の原形態は、日付の有無・題詞の有無等による分析から、断簡として五つの歌箱に納められていたものであろうことが推定される。さらに、その成立過程は、坂上大嬢の越中下向後、骨格をなした始めた巻十九が、天平勝宝五年八月池主との都での再会を契機に、家持によって編まれ、池主死後の天平宝字二年ごろ巻十七〜十九の三巻が私家集「大伴家持歌集」として完結し、やがて、十五巻本を「古」とし末四巻を「今」とする二十巻本萬葉が成立する。本書は言う。「井上立太后、他戸立太子、大中臣朝臣清麻呂東宮傳、大伴宿禰伯麻呂春宮亮、そして、十五巻本にもかかわり、十余年ぶりに都に腰を落ちつけ春の季節を迎えた大伴宿禰家持——宝龜二(七七一年)年という年は、十五巻本から二十巻本への成長が考えられて然るべき絶対の年であったと思う。」(下三九四頁)と。そして、現存萬葉にほぼ近い二十巻が成ったのは、早良皇太子、家持春宮大夫専

任時代の延暦元年(七八二)五月から同二年十二月末までの一年半の間のことではなかったかと(下三九七頁)。この間の考察・論証は微細にわたって具体的であると共に迫真的である。

九世紀初の桓武朝延暦末期から平城朝大同にかけて、井上皇后、早良皇太子(崇道天皇)、大伴宿禰家持らの復位鎮魂が行われるとともに、延暦萬葉は平城萬葉として甦り、萬葉集は認証されるにいたる。時代の状況のほかに古今集序文の的確な解釈がそれを傍証する。本書は一貫して、萬葉集の構造、各段階の「本」の性格とその成立の時点の状況との有機的な関連を探究し、後宮的、社会の必要のための類聚歌集編纂の意識から、民族の伝統的な心意を集合した古代歌集を伝えようとする文学意識へと、編者の心を追求する。その、読者を説得してやまぬ著者の気迫にわれわれは圧倒されるのである。しかし、ここまで来てもまだわたしの腑に落ちないところもある。前段階を「古」として「古今」倭歌集が編まれ続けたわけだが、そのどの段階においても「古」の部への手入れ、追補や増補が行われている。そして、その具体的な様相はなお十分に明らかになつたとは言いがたい。

例えば巻八の「宿禰」のない「家持」の資料は、いつ加えられたのか。本書は、「大伴宿禰家持歌集」に、巻三・四の扱った資料から抽出された季節歌群と「家持」歌群とが併せられたのは、同一時

期だとする。しかし、かつて発表した私見によれば、たとえば「なでしこ」は宿禰家持歌集では秋だが「家持」の「なでしこ」の歌は夏に採られており、巻十でも「なでしこ」は夏の季語である。それで、宿禰家持歌集から巻八の「家持」歌群追補の時期（巻十編纂の時期）へ、かなり大きな時の経過と季節感の推移とがあつたものと思われた。この私見は本書の考えと相容れない。そこで本書は私見を批判して、こう説く。宿禰家持歌集は夏の歌を一括して葬つた。そして、宿禰家持歌集の歌と家持歌群とは元來資料的に一つのものである。その双方に「なでしこ」の歌があるのは、宿禰家持歌集を編む段階で「なでしこ」が季語としての定着性をもたなかつたからだと。

しかしながら、巻八の「家持」歌群は、宿禰家持歌集で葬られた夏歌のみではない。宿禰家持歌集を編む時に何かの事情で漏れていた春歌や秋歌をも含む。それが後に巻八の春・夏・秋に編入されたわけである。特に「なでしこ」の家持歌は夏雑歌と夏相聞との最後に追補された形迹がいちじるしい。

だいいち宿禰家持歌集で「なでしこ」が秋の季語と認められなかつたとしたら、その歌は何によって秋歌と認められたのか。本書は言う。一五三八は題詞に「詠秋野花」とあり、一六一〇には「高円の秋野の上の」とあり、一六一六は「秋萩」を歌った山口女王の作

（一六一七）と連れ立って宿禰家持歌集に採られ、一五四九はその直後に「秋萩」を歌う湯原王の歌（一五五〇）がある。「その大部分は、秋の歌と判断できる根拠が別にあつた」（上二六四頁）のだと。前二者は「なでしこ」以外にも秋季を示す語が歌詞中にあるから、「なでしこ」が季語であつたともなかつたとも言える。が、後の二首はそうはいかない。

笠女郎贈_二大伴宿禰家持_一歌一首 1616 なでしこ

山口女王贈_二大伴宿禰家持_一歌一首 1617 秋萩

湯原王贈_二娘子_一歌一首 1618 秋萩

この三首は、巻四の

笠女郎贈_二大伴宿禰家持_一歌廿四首 587 ~ 610

山口女王贈_二大伴宿禰家持_一歌五首 613 ~ 617

湯原王贈_二娘子_一歌二首 631 ~ 632

といった歌どもと同一資料から抽出された季節歌であつたこと、本書も認めるところである。しかし、それはその歌が季語を有するがゆえに抽出されたのであつて、笠女郎の歌が「山口女王の作と連れ立って」いたからではない。紀鹿人の歌（一五四九）とて同じであろう。問答だとか、同一題詞下にあるからというならともかく（宿禰家持以外には巻八にその例のあること拙論に述べた）、季語なしに、独立した別題詞の歌が、ただ「連れ立って」採られたという例

は他に一例もない。

一步譲って、宿禰家持歌集では歌詞以外に季節判断の根拠が別にあつたものとしよう。では「家持」の「なでしこ」の歌(一四九六・一五一〇)が夏に採られたのはなぜか。これも判断の根拠は歌詞以外にあつたのだろうか。無題詞の詠物分類の卷十でも、そうなのか。卷十で「なでしこ」三首が

夏雑歌「詠花」一九七〇・一九七二

夏相聞「寄花」一九九二

すべて夏に採られているのは、それが夏の季語性を有したからであることを、よもや著者は否定されまい。だとすれば、最少限、卷八では季語性をもたなかった「なでしこ」が卷十で夏の季語となつたのはなぜかを問わなければなるまい。

まして、家持にあつては、「なでしこ」は「秋さらば見つししへと妹が植ゑ」たのであり(3・四六四、天平十一年)、家持を主賓とする宴席において家持の部下久米広繩が「なでしこは秋咲くものを」(19・四三三一、天平勝宝三年)と歌っている。本書が十五卷本萬葉の編纂の時期とする天平末期から勝宝初年にかけて、家持圏で「なでしこ」が秋の季節の花として自覚的に歌われたことは明らかなのである(季感に動揺はあつたにしても)。

卷八・十の季節分類は、卷七・十一・十二・十四などの寄物分類とともに、もっと微に入つて考えてみなければならぬ。本書は、卷七・十三・十四などにおいて古代の道国郡図式順が、遠心的に整えられているのに対して、卷十六増補部では、道は求心的、国は遠心的と異なっていることを指摘し、東歌の最終編纂にタッチした家持以外の増補者を考える(下六二頁)。同じようなことが卷八でも言へはすまいか。卷三・六・九・十三などの「福麻呂」資料追補の時期が橘諸兄没後にまで引き下げて考えられる以上は、「家持」資料の追補についても、それがないとは言いきれまい。

萬葉集を齊整たる構造体としてとらえきること初めて成功した本書に、微々たる問題のすべての解決を委ねることは、後進の怠慢であろう。以上、一読は恣意的な読み方に終始したが、もう一度本書を徹底的に読み直したいと思う。萬葉集を作品とし表現体として読もうとするほどの者は、みな研究史上の最初の巨峰として出現した本書を自分の足できわめねばなるまい。そして、おのがじし道書を次の一步から始めねばならないのである。

〔上巻 昭和四十九年九月三十日刊 A5判 四二六頁 人名・書名
論文名索引 六〇〇〇円。 下巻 昭和四十九年十一月十日刊 A
5判 四六二頁 人名・書名論文名索引 六五〇〇円。 塙書房発行〕

編輯後記

○年初三ヶ日のおだやかな好天とはうらはらに、この冬は、例年になく異常な寒さに襲われた。悪性の風邪の流行もあり、ことしも、あまり香ばしくない一年のように思われる。

○それにしても、公共料金の軒並み値上げ、わけでも、授業料や通信費の値上げは、われわれ学徒のふところに直接ひびく。学会にとっても雑誌の送料の高騰は痛い。

○さて、今年度(第二十九回)の萬葉学会全国大会は、熊本女子大学本田義彦教授のお世話で、十月二・三・四日に九州(人吉市)で開催される運びとなり、鋭意、その準備が進められている。大要は、次号に発表できるかと思うので、ご期待を乞う。

○本誌の編輯は、次号から神堀氏と交替する。この二年間皆さまのご鞭撻によって、定期刊行の責を果たすことができたことに感謝の意を表したい。今後とも、活潑なご投稿と会費の年度初めご納入とによって、編輯子をご激励いただきたいと思う。

(井手 至)

投稿規定

- 一、投稿資格は会員に限る。
- 一、内容は萬葉に関連する各分野の研究論文。
- 一、分量は原則として四百字詰原稿用紙三十枚程度(ただし「黄葉片々」欄は十枚以内)。
- 一、原稿は一切返却しない。採否決定は編集部に一任のこと。
- 一、論文掲載の際には本誌三部を贈呈する。抜刷の作製(実費執筆者負担)は、あらかじめ希望のある場合に限る。

萬葉学会会則

- 一、本会は萬葉学会と称する。
- 一、萬葉研究者、愛好者は誰でも申込みによって会員となることができる。
- 一、会員の研究発表機関誌として季刊「萬葉」を発行する。
- 一、本会は随時、萬葉に関する見学旅行、文献の展観、研究発表会、講習会、講演

会、図書の出版、その他を行なふ。

- 一、会員は、年額二千四百圓の会費(誌代を含む)を年度初めに納入する。

- 一、本会の事務は

大阪府吹田市千里山東三丁目

関西大学文学部国文学研究室内(郵便番号五六四)

において行なふ。

昭和五十一年三月二十日印刷
昭和五十一年三月二十五日発行

頒価六百圓

大阪府吹田市千里山東三丁目
関西大学文学部国文学研究室内
(郵便番号五六四)

編輯者 萬葉學會

振替大阪二九一四七

京都市北区小山堀池町二九

発行者 大地

電話(七七三)二一一三六一

昭和五十一年三月二十五日發行

萬葉

頒價 六百圓
送料 二十圓